

## 特 集 2

# とちぎ圏央まちづくり協議会 第2回「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム ～江戸から日光へ 広域連携による歴史軸の物語～

…… 要 綱 ……

1. 日 時 2026年2月27日（金）14：30～17：00

2. 会 場 宇都宮共和大学 宇都宮シティキャンパス 401 大講義室

3. 次 第

(1) 基調講演①「神君家康公 日光を選ぶ」

日光東照宮特別顧問・元禰宜

高藤 晴俊 氏

基調講演②「歴史資源を生かした広域観光振興」

日光市長

瀬高 哲雄 氏

(2) パネルディスカッション

パネリスト

(前 掲)

瀬高 哲雄 氏

鹿沼市市長

松井 正一 氏

宇都宮市総合政策部振興担当副参事

馬場 将広 氏

栃木市東京サテライトオフィス所長

野尻 博之 氏

小山市総合政策部総合政策課 連携・協働調整担当

菅沼美智子 氏

小山市立博物館学芸員

尾上 仁美 氏

壬生町東京サテライトオフィス所長

落合 正浩 氏

壬生町歴史民俗資料館学芸員

藤栄友里絵 氏

栃木県生活文化スポーツ部文化振興課課長補佐

齋藤 恒夫 氏

司 会

宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長

須賀 英之

主 催 | 一般社団法人 とちぎ圏央まちづくり協議会

共 催 | 宇都宮まちづくり推進機構・宇都宮共和大学都市経済研究センター

## ■主催者挨拶

一般社団法人 とちぎ圏央まちづくり協議会 常務理事

新見 徹 氏

皆さんこんにちは、昨年5月に続き第2回目の「とちぎ SHOGUN 物語」です。

江戸から日光の歴史資源の掘り起こしと自治体の広域連携をもとに、沿線の産業振興を目指し須賀学長のご指導を頂きながら進めております。

今回はお手元にありますように高藤晴俊先生にお話を頂きます。

高藤先生とは2回程お会いしましたが、繰り返し申されたのは「家康が江戸にいて何故日光を選んだのか？」でした。

生前一度も日光へ行ったことのない家康が、日光を選んだ秘話が伺えることを楽しみにしております。

それと私の世代ですと、信長・秀吉・家康の中で信長・秀吉派が多いのですが、今回高藤先生とお会いして家康の人としての奥の深さというか、是非家康の勉強を再度しようと思うように至りました。

今日はもう一かた、日光市長の瀬高哲雄様にお話を頂きます。

高藤先生の後で話しにくいと仰ってましたが、本家本元のお立場で世界遺産日光と行政のお取り組みのお話を伺いたいと思います。

それから今回開催のもう一つの狙いは、前回の宇都宮市・壬生町に加え、日光市・鹿沼市・小山市・栃木市の皆さんに入って頂き、六つの自治体の広域連携です。

更に栃木県からは入庁以来専門職の齋藤課長にご参加頂き、とちぎ全体の論議を深めて頂きたいと思います。

最後に、毎回開催にあたり、宇都宮共和大学の須賀学長には大変お世話になっており、改めて御礼申し上げます。

簡単ですが開会の挨拶とさせていただきます。

## 基調講演

①

# 「神君家康公 日光を選ぶ」

日光東照宮特別顧問・元禰宜

高藤 晴俊 氏



皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました高藤です。

私の肩書なのですが、**「日光東照宮特別顧問・元禰宜」**とあります。禰宜と言いますのは、神主の身分です。一番偉いのが宮司です。大きな神社ではその下に権宮司がいて、その下の禰宜ですから、大して偉くも何ともないのですが、

私のモットーは、「今日の仕事は明日へ延ばせ」でした。従って、仕事をあまりしなかったのです。どうしてかと言いますと、家康公には「人の一生は重荷を負うて遠き道をゆくが如し」という有名なご遺訓がありますが、締めくくりの言葉は、「及ばざるは過ぎたるよりまされり」です。「やりすぎるな」と。過労死するほど、残業までしてやるのは駄目です。それで、「今日の仕事は明日に延ばせ」でいい、との流儀でやってきて、見事 65 歳で定年退職を迎えました。これからは自由の身と思ったら、退職の辞令と同時に宮司に呼ばれまして、「おまえは、縁を切るつもりか」と言うのです。「いや、定年ですから、ゆっくりさせてください」と言ったら、「縁が切れないように、肩書だけ何かを残しておけよ」と言うのです。「肩書だけでいいのなら、適当に付けておいてください」と言ったところ、特別顧問という肩書を頂いたのです。当然、無給です。

それで何をやっているかと言いますと、在職中と変わらずです。広報宣伝が、私の仕事だった。「日光東照宮はいいところです、ぜひおいでください」と、いまだにそれをやっているのです。私は、家康公の「厭離穢土、欣求浄土」の言葉を知って、神主になる自信がついて、日光東照宮に奉職し、無事、定年まで勤めて家族を養い、円満退職出来たのですが、「今日の仕事は明日に延ばせ」、で手抜きしていたので、その分退職後も無給でお礼奉公、いまだに日光東照宮の宣伝をしているわけです。

今回のテーマの「神君家康公 日光を選ぶ」のタイトルも、実は宣伝を兼ねているのです。去年出した、私の本のタイトルと同じです。その本をなぜ書いたかと言いますと、NHKの大河ドラマの「どうする家康」のタイトルを聞いた時に、これは何を意味しているのだろうと思ったのです。「どうする家康」と言ったら、迷いに迷っていろいろと、「どうしよう、どうしよう」と、

うろたえる姿でしょう。それで遺言も、「どうする、どうする」で考えたのだろうと気付いたら、今までもやもやとしていた部分が、きれいに見えてしまったのです。

何が見えたのかと言いますと、東照宮が日光に、なぜできたのかと言うことです。これが神主としての私の終生の課題だったのです。つまり、なぜ家康公は、日光に自分を葬れと言ったかと言う問題です。一般の歴史学者は、「死んだら神に祭れ」との遺言を聞いて、周りの者たちのいろいろな思惑もあって、その中で一番うまくやったのが天海でしょう、自分が日光山の貫主、トップであるというので、家康公の遺体を日光に持ってきて、今日で言う東照宮を造ってしまえば自分にはかなりの利益があるからと遺言にはなかった事までやったと、そういう受け止められ方をされていたわけです。

そうすると、東照宮で給料をもらう人間の立場からは都合が悪い。後ろめたいような感じがしてくるのです。だって、天海が横車をして、遺言をねじ曲げて造ったものが、東照宮となってしまいます。日光では、天海僧正は大恩人ですから、その天海さんの功績をたたえるわけです。日光で特に学識のある人たちは、輪王寺のお坊さんたちが多いですから、日光の歴史も天海さん中心に語られてきたのです。

だから、「どうする家康」なんていう、家康公を主体とした立場からは考えませんから、「どうする天海」だったわけです。

ところが静岡などに行きますと、「久能山が本家です」などと言うわけです。あの「どうする家康」が始まる前後、少し前からでしょうか、静岡でやっていたキャンペーンをご存じの方はいらっしゃいますか。「余ハ此處ニ居ル」というキャンペーンをやったのです。どういうことかと言いますと、家康公は今も静岡に、久能山に眠っていらっしゃいます、という意味です。静岡の方が言う分には、一向に問題はないのでしょうか。ですが、では、日光はどういうことになるのでしょうか。彼らが言う本音は、家康公の遺体は日光などにはなくて、久能山にあります、と言うことです。だから、「余ハ今モ此處ニ居ル」と。

私も在職中であれば、それ以上のことは言わなかったと思うのですが、もう辞めてしまいましたし、給料をもらっていませんから。言いたいことを言っていると思うようになってきました。ついこの間まで私の同級生が久能山の宮司でしたが、今の宮司は私の後輩です。後輩だから我慢しなさいということで、本当のことを言うようにしてきました。「余ハ此處ニ居ル」と静岡で言っているのは、それはそれでいいのです。家康の御霊は久能山にも祭られていますから。

だからと言って、遺体が久能山にあるわけではないのですという話を、今日はメインにしようかとも思って来たのですが、どうなるかは分かりません。もう写真が映っていますから、ここから行きます。もうちょっと暗くしていただいたほうが、写真の写りがきれいだと思いますので、私の顔は、もうこれ以上見えなくていいと思うのです。私はアマチュアカメラマンなものですから、話よりも写真を見てもらえる方がうれしいのです。

これはご存じの、久能山東照宮です。久能山東照宮の写真を、最初に映すのは家康公の遺言です。これが宿命なのです。仕方がありません。家康公は今から400年ほど前ですが、1616年、75歳で亡くなります。亡くなると、自分が死んだらまず久能山に葬り、1年たったら日光へ移し祭れ

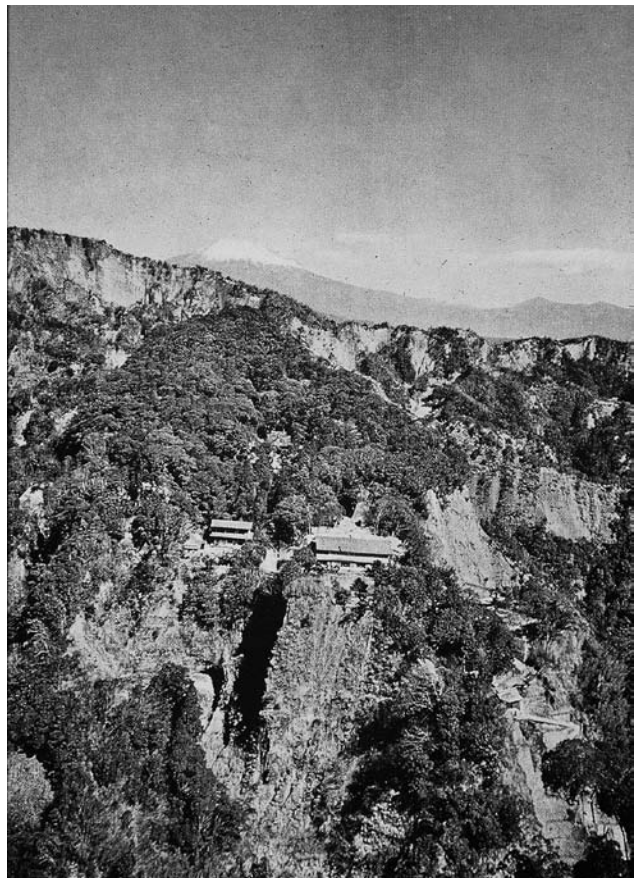
という遺言を残します。だから写真もまず久能山からです。駿府城で亡くなりますとその晩のうちに、ご遺体が久能山に運ばれます。そしてこの社殿が出来るのは日光東照宮が出来たあとです。

この社殿の後ろに、家康公のお墓があります。次のコマにしてください。これが家康公のお墓です。昔からなのですが、久能山に行きますと、「東照宮と言えば日光が有名ですが、実はこの久能山が本家です。なぜなら、家康公は先ず久能山に葬れと、日光には移し祭れと言いましたから、分祀のようなものです。だからここが本家です」、と書いていたわけです。

日光の人間などが行きますと、そういう説明を聞いて面白くないのです。戻ってきてから、私に文句を言うのです。「おまえ、久能山の神主は威張っているぞ」と言いますから、「何ですか」とききますと、「日光は分家で、久能山が本家だ」と言われて面白くなかったんです。ただ言われて黙って帰ってきて、私に「あんなことを言わせておいていいのか」と文句を言われても、私も困るわけです。そこで何とか言いつくろう方法はないかしらと、いろいろ考えるわけです。ですから動機は不純なのです。

そうしたら、驚くことに気が付いたわけです。次のコマにしてください。これは久能山の航空写真です。これは久能山東照宮が撮った写真を拝借しているのですが、この写真は、久能山では発表していながら、その意味に全然気付いていなかったのです。お分かりのとおり、これは富士山です。これを見れば、久能山は富士山を背にしていると気がきます。

次のコマにしてください。ところが地図を思い浮かべたら、こういうことなのです。これは日本の中心部の地図です。このあたりの細かい字が読めなくても、別に関係ありません。視力検査ではありませんから。ここは房総半島、そして東京湾です。三浦半島があって、伊豆半島があって、駿河湾です。この鳥居の印が、久能山東照宮です。その西が静岡市内になります。ここに駿府城がありました。



家康公は、ここで亡くなります。遺言は、自分が死んだら久能山に葬り、1年たったら日光に移し祭れ、だったわけです。久能山の写真を見ますと、後ろに富士山が映っています。ええ？と思って、改めて地図を確認したら、その延長線上に日光があります。つまり日光と久能山を結ぶ線上に、ぴったり富士山があるのです。これは偶然なのかと思ったのが、きっかけなのです。家康公の遺言は、久能山と日光を指定しただけではありません。芝の増上寺で法要を行い、岡崎の大樹寺に位牌を立てると、4カ所を指定したわけです。調べてみたら、岡崎と久能山は東西一直線な

のです。北緯 34 度 57 分 30 秒という位置です。しかも、あのお墓は真西を向いているのです。

ところが、社殿の中心軸は拝殿、本殿、お墓と北々東に延びて、更に富士山、そして日光です。つまり久能山で拝めば、日光東照宮を拝んでいるわけです。これを、「久能山が本家です」と言われて面白くなく帰ってきた人たちに言いますと、「私たちは拝まれているのですね、矢張り日光が本家だ」などと言って、安心していたのです。そのことに気付くと方角は無視できない。私も戦後の生まれですから、方角などは迷信だと思っていました。科学万能の時代に育ちましたから、方角などは、誰もまともに考えません。研究者ともなればなおのこと、方角など無視します。ところが先ほどの地図を見れば考えざるを得ません。お墓が西向きで、西の方角に誕生地の岡崎があります。

実はこのラインは、不思議なことにさらに西に行きますと、京都なのです。京都も、実は緯度の一番近いところは阿弥陀ヶ峰と言って、秀吉のお墓がある位置なのです。秀吉のお墓も西向きなのです。秀吉のお墓から西に何があるかと言いますと、西本願寺です。ご本尊は阿弥陀様です。葬られた山は、阿弥陀ヶ峰です。阿弥陀ラインをつくっています。それに倣って、実はこの東西ラインを意識したのではないかと。久能山から岡崎ですが、岡崎には先祖の菩提寺、大樹寺があります。浄土宗ですから、ご本尊は阿弥陀様です。秀吉に倣って同じ方角の並びで、久能山の墓所も、西向きです。

家康公が亡くなる時、「西を向いて葬れ」と言っているのです。そして三池典太という刀で罪人を斬らせて、これで守り刀とする。何を守ろうとしたかと言いますと、おそらく西を向いているのは、自分が敗者に追い込んだ、秀吉を神と祭る豊国神社、そのたたりを抑えるために、同じライン上の久能山に西向きにその刀を持って、葬られたと考えられるのです。これは今まで書いてきませんでした。今、初めて言うことです。正式に神となって日光に祭られるまでが、不安定な時期なのです。死後一周忌が過ぎたら、一説によれば三回忌までにとの言い方もありますけれども、日光に移され、正式な神として祭られれば安心なのです。

では、なぜ最終的に祭られる場所が日光だったのかとなるのですけれども、納得できる理由が今まで明らかにされていませんでした。いろいろ条件は考えられるのです。日光はいいところですよ。いいところを数え上げれば、いろいろとあります。でも、それは必要条件の一つであって、それで十分とはなりません。日光と同じような条件を持ったところなら、他にもあるのです。それにもかかわらず、なぜ日光だったかが今日まで明確に示されませんでしたので、天海さんが日光にいたから、自分の利益のために遺言をねじ曲げたなどと誤解されてきました。日光では恩人ですけれども、日光以外の人にとっては、恩人でも何でもないのです。他の地方の立場で考えてください。日光に東照宮を持っていかれてしまったのです。面白くないのは当然です。

そして、歴史学者や評論家などは権力者が嫌いですから、当然、天下を取った家康公を評価したくないわけです。

分かりやすく世俗的な言い方をしますと、野党が与党を責めるようなものです。本当にそこまでひどいのですか。人間は誰れしも批判されても仕方がない部分は、もちろんあります。けれども、悪く言いますよね。それと同じなのです。少なくとも諸国の大名や侍たちの多くが、家康公にとっ

ては野党なのです。そして、研究者は全国にいますけれども、全国の歴史をたどったら、皆が徳川幕府に頭を下げなければいけなかった、地方の大名と関わりのある人が多いですから。参勤交代で江戸に向かった人たちは、皆、徳川将軍家のせいで苦勞させられたと思っていますから、いいことを言わないのです。それが現実でした。ですから、日光にいと、何とか正当化しなければいけませんから、いろいろと考えざるを得ないわけです。

そのようなことをやっている時に、星々を背景とした陽明門の写真が撮れたのです。私はアマチュアカメラマンで、学生時代から写真が好きでやっていました。東照宮に勤めてからは、東照宮の写真を撮り続けてきました。ところが、明治4年から日光東照宮の写真撮影は許可になっているのです。東照宮は380年前に建て替えてからはほとんど変わっていませんから、誰が撮っても被写体は同じなのです。新たなアングルなど、絶対に見つからないのです。プロと言わず、アマチュアと言わず、実は数多くの人が撮っていますから。

そこで、夜の東照宮ならば普通の人は撮れないと思って、夜の写真を考えたのですが、これもまた駄目なのです。なぜなら、特別な許可を取ったプロは、奉納金を積んで許可をもらうわけです。大型の機材を持ち込んで撮りますから、夜の写真も、プロにはとてもかないません。新たなアングルなどは無理と思っていた時に、私の子どもが小学校5年生になりました。子どもがどんな勉強をしているかと思って、教科書を見ていました。理科の教科書でした。その中に北極星を中心に星が回っている写真があって、それを見た時にひらめいたのです。

神主は、宿直があります。宿直の晩は境内巡回です。懐中電灯を1つ持って、境内を歩くのです。怖いのです。ですから、急いで戻ってくると、先輩に叱られるのです。早すぎる、と。これでは巡回にならない、もっとじっくり回ってきなさいと言うのです。じっくり回ってこいと言ったって、夜の境内で何をするのでしょうか。仕方がありませんので、懐中電灯であちらを照らし、こちらを照らしたりしている時に、陽明門の上に北極星があることに気付いていましたから、ひょっとしたらこのような写真が撮れるのではないかと思い付いたのです。

写真の取り方は、教科書に書いてありますから、そのとおりにやったら、写ってしまったわけです。写ったら、自慢したくなります。と言いますのは、夜の東照宮の写真は、既にプロたちも撮っています。ですが、星空を入れた写真は誰も撮っていないのです。私が最初なのです。となれば、自慢したくなるのは分かりますよね。「どうだ、俺が最初だ」、と。ここで終わらないところが私の悪い癖と言いますか、口から出まかせをいろいろと語ってしまうわけです。「見てください、北極星中心に星が回っているでしょう。でもこうやって見たら、陽明門を中心に星が回っています。つまり、日光東照宮が宇宙の中心なのです」、などと言い出したわけです。

言い出して気が付いたのです。ひょっとしたら当時の人たちも、このイメージを持っていたのではないかと。そう思って調べ始めたら、何と、家康公はこのことをきちんと知っていたのです。資料にも上げておきましたが、家康公が晩年にいろいろとやっている中で、京都のお坊さんたちに作文を書かせる、筆記試験をやるのです。慶長19年なのですが、京都五山の、5つのお寺のお坊さんたちが作文を書くのですが、その理由は、彼らは外交文書の取り扱いをしているのです。ところが、本業以外の仕事ですし、まだ家康公からお寺の領地の朱印状をもらっていません。安

堵されていないわけです。さらに外交文書の取り扱いをするのですから、ベースアップを願い出るわけです。「もっと増やしてください」と。家康公は快くオーケーするわけです。「いいでしょう」と。ただし、国の外交文書を取り扱うのですから、その資質、素質があるかどうかだけは、テストさせてもらいますというので、作文を書かせます。

その作文の題材に選んだのが、『論語』の一節なのです。これはプリントに資料として入れておきましたけれども、参考資料の中央あたりです。慶長19年、「林道春及五山衆試文稿」です。これは南禅寺にある文書なのですけれども、家康公の書かせた題は、『論語』の一節です。「子曰、爲政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之」いう一節があるのです。これは『為政編』の冒頭の言葉です。『為政編』ですから、まつりごとの話です。

どういうことかと言いますと、北極星を中心に、天体は規則正しく移動している、動いています。ここ北極星には天帝がいらっしゃる。天帝の徳を頂いていい政治をすれば、星々が規則正しく動くように、世の中も規則正しく治めていくことができますと、孔子が言っているわけです。この言葉を家康公は知っていました。だから、この言葉を題材に作文を書かせたのです。どのようなレポートが出てくるが問題なのです。

18人のお坊さんたちが、慶長19年3月に京都から出てきて、駿府の家康公の前でこの問題を出されて、2日後に提出するという段取りになるわけです。その時に、家康公は林羅山を呼んで、「彼らがどのような作文を書いてくるかが楽しみだね、ところで金地院崇伝が序文を書いたから、読んでみなさい。よく書けているだろう」と。更に、「羅山、おまえは後書きを書け」と言われました。「私などのような若造がと思ったけれども、家康公の直々の命令ですので、やむを得ず、私も後書きを書きます」として、林羅山も作文をします。

そうしますと、どのような作文が出てくるかと言いますと、もう決まりきったものになります。「家康公が立派な政治家ですから、天帝の徳を頂いて天下人になったから、家康公を中心に世の中は規則正しく動いていく」と。どうもこれは金地院崇伝の策略なのです。この題材で作文を書かせれば、こういう文章を書くの見当はつくわけです。徳川幕府の正史である『徳川実紀』には、その出来上がった作文を読んで、家康公はご機嫌斜めだったと書いてあります。「皆ごまをすっているような文章だ。肝心なことは、いかにしたらこの天帝の徳を身に付けることができるのか、それを説いてほしかった」と。これは建前論ですよ。だってその題材で書けば、皆が同じようなことを書くことになるわけです。

問題は、それを書かせることが肝心だった。つまり金地院崇伝や林羅山、家康公の取り巻きが、いくら家康公は偉いと言っても、駄目なのです。外部の人間に、家康公はまさに北極星と同じです、天帝の命を受けた天下人ですと言わせることが肝心だった。となりますと、これはやはり崇伝の画策だろうと考え付くわけです。崇伝が、家康公を北極星に見立てようと画策をしました。これは崇伝の画策と言うよりも、家康公自身がこの北極星の意味をよく知っていたということが肝心だと思ふのです。

と言いますのは、当時、今は天道思想という名前ですけれども、「天」という存在があると信じられていました。天は天命、天罰などを与える、えたいのしれない存在です。天道

とも言います。「天道畏るべし」などは、戦国時代によく使われた言葉です。人の運命も、戦の勝ち負けも天の配剤です。いいことをすれば天が報いてくれる、悪いことをすると天の罰が下る。運命のように理解する人もいました。しかし、その天道思想の大本は、中国に生まれた思想であって、天下を収める皇帝は、宇宙を支配する天帝から選ばれた者が天下人になるという考えだったわけです。

徳がないと、天下人になれません。この思想が中国で生まれたのは、おそらく中国には徳のある天下人がいなかったからです。いなかったから、生まれたのです。周辺国のいいところは、そういう思想を受け入れたことです。日本人は、そういう思想が、理想的な考え方があると、真面目に実践するのです。

つい最近読んだ本ですけれども、思わぬところにヒントを得ました。奈良の大仏がなぜできたかという話なのですけれども、聖武天皇が天皇として世を憂いたのです。疫病がはやる、災害が起きる、「なぜだろう」と。これは自分のまつりごとがよろしくないから、だから天帝からお叱りを受けたのだ、その結果が災害や疫病だと。「徳を積まなければいけない」、それを解決する為にはどうすればいいのか。そこに入り込んできたのが仏教です。仏教の教えをさらに学んで徳を積み、天も私を認めてくれるのではないかと考えた。そのために発案したのが、あの奈良の大仏の建立だったのです。そして、それは自分一人がやっただけでは駄目で、周りも、国民が等しくそういう思いを持たないと、天は許してくれないでしょうと。それで、国家プロジェクトで、奈良の大仏ができたのです。

これが天下人の思想なのです。疫病がはやる、災害が起きるのは、科学的に考えたら、天皇個人の資質などは関係ない筈です。でも、それを自分の責任と思うというのはどういうことかと言いますと、慢心しないということです。どれほどいい政治をやったって、これでいいと思っはいけないということなのです。どこかの政治家どころか、今のあらゆる国のトップに聞かせてやりたいです。自分が正しいと思っはいけないのです。災害が起きるのも、天候が不順なもの、疫病がはやるのも、自分に徳がないからと謙虚に反省する、トップにある者が、です。これが天道思想の肝心の点です。

徳川家康公は自分自身をどう考えたでしょうか。なぜ、自分が天下人になれたのか、です。今までの研究者が言うとおりのことです。信長や秀吉に比べて、ずば抜けた能力を持っていたのかと言ったら、おそらくそうではなかったのでしょう。平凡な、常識的な人間だったと思うのです。本人自身はそう考えたと思います。同盟者であった信長や、かつては自分よりも身分が下だった秀吉に臣下の礼を取らざるを得なかった。その連中のつぶれたところを、しっかり見ていたのでしょう。

自分が、なぜ天下人になれたのか、そう考えた時に、信長や秀吉になかったもの、武田信玄になかったもの、上杉謙信になかったものは何かと言ったら、自分だけは「厭離穢土、欣求浄土」の旗印を掲げていた、ということなのです。「厭離穢土、欣求浄土」とは、この世は穢れきった穢土だから、こういうところは早くおさらばして、欣求浄土、阿弥陀様の極楽浄土を求めるということですが、家康公は、憎い敵だから倒すのではなくて、この世から戦争をなくすため、平和を

もたらすために戦うのだ。この世を浄土のような世界に作り直すのだ。自分は死んで阿弥陀様の浄土に行くのではなく、「この世を浄土に作り替える」のだ。そういう思いで戦うから、無益な殺生は極力しません。残酷なことはしません。残忍なことはしません。それが信長や秀吉と違う点だったろうと。

慈悲の心を持ってまつりごとを行うことが、信長や秀吉にはなくて、自分には出来た。天はそこを認めてくれたのではないかと。そう思った家康公が、最晩年になって、政権は2代将軍に渡したし、これが続いていけば、平和を維持できるだろう。でも100%安心はできません。そのため亡くなる時に、自分を神に祭れと言った。

人間は死んだらおしまいのではないのです。おしまいと思っている人もいるかもしれませんが、日本人は昔から、死んでも魂は残っていると信じて来たわけです。だからいろいろな供養をするわけです。分かりやすく言いますと、私も孫ができて初めて気が付いたことですが、孫のかわいさは、無条件なのです。これでもう思い残すことはないと思ってあの世に行く人も、おそらく思い残すことはあるのです。それは何かと言いますと、この世に残していく孫やひ孫でしょう。子どもとはいろいろとありますが、自分の子孫は守りたいのです。子孫も自分のおじいちゃん、おばあちゃんはあの世から自分を守ってくれるという信頼関係があるわけです。

だから、普通死後の法要は三十三回忌、あるいは、五十回忌までやって、もうその後やりません。どうしてやらないかと言いますと、もう故人の個性がなくなってしまうわけです。覚えていませんから、そうすると先祖さまの部類に入るのです。そうしますと、祖先神になります。庶民であっても、自分の子孫を守ることができるわけです。死んだら仏様と言いますが、仏様も神様も、日本人にとっては一緒です。あの世に行っても、この世にいるわれわれを守ってくれる存在になります。

ところが、天下人だけは違うのです。この世の政治を動かした人は、この国の未来にも責任があるのです。そう考えた家康公は、死んで終わりではないと。自分は、子孫だけを守るような狭い考えではいけない、この世の平和を守らなければいけない。そのために極楽浄土に行くのではなく、この世を護る為に神として祭れと遺言をしました。これは、何らおかしいことではないのです。最近の研究者は、それを神格化などと言いますが、大変失礼な言葉です。神格化とは、神でない者を神としてあがめることを言うのです。これは一神教に毒された考え方です。西洋人の考え方です。400年前に日本を訪れた、あのキリスト教のバテレンたちの考え方、見方と一緒にです。

日本人は昔から、誰でも神になれるのです。誤解されているのは織田信長です。信長を尊敬している人はいると思います。でも信長は生きていた間に、自分を神としてあがめろと言いました。この事に関しては誰も思い上がりだとして擁護しません。なぜですか。決しておかしい話ではないのです。ごくごく当たり前の話です。神や仏は、われわれを救ってくれるはずなのです。でも、あの戦国時代、人々を誰が救えたのですか。信長だったら救えたのではないですか。経済も豊かにしていきます。あの信長がそのまま天下人になったら、戦争のない国をつくれたかもしれません。人々の幸せを約束できた、少なくともその途上にありました。だから、具体的にお寺のお坊さ

んや神社の神主が人々に幸せをくれたのか、俺ならおまえたちを幸せにしてやるぞと。それを思い上がりだと思っているのは、日本人の神観念に対する認識不足です。

日本語では今でも普通に「あの人は神様です」と言うではないですか。例えばプロ野球では「神様、仏様、村上（神）さま」です。かつては「稲尾さま」でした。世の常ならぬ力があれば人間だって神様になり得るわけです。これはキリスト教の考え方と違います。われわれだって、自分の祖先は祖先神、神様になれます。天下人としての責任は死後もあります。それは、国を守る神になると。だから、信長は生きている時にそう言うだけで、何らおかしい発想ではないのです。信長の場合の問題は、ちょっと残忍なことが多すぎた、敵が多すぎた、だから志半ばで、謀反に遭います。そして亡くなったその後も、信長教の信者ができなかったのも、すぐに神に祭られなかっただけのことであって、信長が、「俺が神だ」と言うのは、神のように働こうとしていたので、何らおかしい思想でも、何でもありません。ただ、普通の人は自ら言いません。本当にあがめられる者は、自分で言わなくても他人があがめてくれるからです。ただ、遺言の時は違います。間違いないようにきちんとやってもらおうということで、家康公は自分を神に祭るよう遺言します。魂をこの世に残して、この世の平和を守っていく為に。そのために、日光を選んだのです。天海さんが日光に居たからではないのです。天海さんが日光に来るのは、慶長18年の末です。京都の五山僧に作文を書かせるのが慶長19年の3月なのですが、その準備は慶長18年の秋ごろから、崇伝はもう画策していたと思われるのです。慶長18年の夏ごろから秋にかけて、金地院崇伝は京都に行って、その下準備をしていたと思われます。天海さんが日光に来るのは、その18年のもう暮れも近い11月なのです。天海さんは、その前年の慶長17年に埼玉の川越に喜多院というお寺がありますが、そこを本拠に、家康公からお墨付きをもらって、天台宗を拡大しようとしていた時期なのです。朱印状までもらっていながら、次の年になぜ日光に来なければならなかったのかと言うことです。

おそらく崇伝や天海が、家康公を中心に、当然、相談しています。つまり自分が死んだら「どうする」かです。秀吉もすでに神に祭られています。秀吉と同じように、何とか大明神ではまずいのです。それを超えなければいけませんから、他の名称で神に祭らなければならない。祭る場所は、家康公は天帝から選ばれた天下人なのです。そうしますと、北の方角が良いのです。天子さまと呼ばれた天皇陛下は、京都の御所では南向き、北極星を背にして座るのです。どうしてかと言いますと、天子さまは天帝の子どもですから。

天帝から選ばれた天下人が日光に鎮まれば、その真南に江戸があります。江戸がこの世の中心です。この世の中心と宇宙の中心の天帝を結ぶ線上に、日光があります。ですから方角からすれば、幕府の本拠地である江戸から北極星の方角がいいとは、おそらく崇伝の発想なのです。崇伝の頭のいいところは、手柄を全部、自分で独り占めにしなかったことです。江戸の北でいいところは日光あたりと思っても、関東に詳しいのは、天海さんです。おそらく崇伝は天海に恩を売る形で、推薦しただろうと思います。それで家康公が、下準備、調査の為に日光に派遣したのが天海さんです。それが慶長18年の暮れ間近になってからです。

そして、おそらく天海さんが日光に来て気が付いたのが、日光の名称のいわれです。二荒山神

社という古い神社があります。男体山のことを、昔は二荒山と呼んでいました。二荒が、日光の古い地名です。いつ日光になったか、これは文献学的に日光という文字が初めて出てくるのは、平安時代末の保延年間のものからです。二荒と呼ばれていた土地が、日光とも呼ばれるようになったことは確かなのです。これを日光ではどう言い伝えられていたかと言いますと、勝道上人によって日光は開かれる、でもその当時は、二荒と呼ばれていました。それが日光に替わるのは、勝道上人の徳を慕って日光を訪れた空海が、勝道上人の伝記を書くために日光に来た空海が、二荒という地名を見て、「荒れる」という字は、縁起が良くない。もっといい字がないだろうかと、「二荒」という字を音読みすれば「にこう」、「にっこう」で、「日光」という文字を与えた。これが日光の伝説として、いわば真実として語り伝えられていたわけです。

その空海が日光に来てなした最大の仕事の一つは今の滝尾神社を祭ることだったのです。今、二荒山神社には新宮、本宮、滝尾と3つのお社がありますが、その滝尾に行って、その土地の神を祭ろうとします。写真を用意してきたのでした。次のコマにしてください。これが滝尾神社です。この神社は空海さんが祭ったというのですが、次のコマです。その神社の手前に、白糸の滝という滝があります。この滝つぼで、この土地の神を祭るため行法を行うのです。そうすると、大小2つの玉が出現して、小さな玉は天補星と名乗りました。次いで大きい玉が妙見尊星、即ち、北極星の神と名乗ったと言うのです。その北極星の神が言うには、「おまえが呼んだから出てきたけれども、ここにはもともと女の神様がいるから、この土地には、それを祭れ」というので、あの滝尾神社ができるわけです。続けて「おまえが呼んだから出てきたけれども、今は必要ない。この世が再び乱れて、私が必要になった時は再び出現するから、それまでは中禅寺湖畔に祭っておくように」というので、中禅寺湖畔に妙見堂というお堂を造って祭りました。



小さな玉は、山内の今の明治の館がある手前に児玉堂という小さな祠があるのですが、そこに祭ったと。

つまり、二荒を日光と呼び替えたと言いますか、日光という地名が付けられた時に、北極星が出現したのです。しかも、世が乱れたら再び出現すると、約束をした土地なのです。となったら、天帝から選ばれた家康公、北極星と一体の存在である家康公が神に祭られる場所として、この世に神として祭られる、約束の地はまさにここ日光だったのです。おそらく、天海さんからの報告を聞いた家康公は確信を持って、日光を選ばれた。家康公が、天海の口車に乗って日光を選んだのではなくて、これは家康公自らが、自分は天下人であるという

自覚の下に、死後もこの世の行く末に責任を持たなければいけない、そのためには天帝と一体になれる土地として、日光を選んだのだと考えられます。

そうしますと問題は、家康公の遺言の内容です。資料に引いておきましたけれども、崇伝が書いた家康公の遺言は、死んだら久能山に葬り、芝の増上寺で法要を行い、岡崎の大樹寺に位牌を建てて、そして1年後に日光に小さなお堂を造って移し祭るようにと言っています。これはある意味、皆が知っていることなのです。ところが、これしか書いていませんので、誤解が生じたのです。なぜこれしか書いてないかと言いますと、実はその後、多少詳しい方はご存じと思いますが、神に祭る時に、吉田神道流の明神号で祭るか、権現号で祭るかという論争があったとされているのです。豊臣秀吉は豊国大明神として祭られました。だから、その例に倣って吉田神道でやれば、家康公も何か大明神に祭られます。それが普通で、当然なのに、天海が横車をして、前例のない権現号にしてしまった、と皆が誤解しています。

それを疑問に思わないこと自体が、私には納得できませんでした。なぜなら、豊臣秀吉が大明神に祭られたのだから、家康公も大明神でいいのですか。研究者にとっては、秀吉も成り上がりですけれども、それが大明神になっているのだから、家康公も大明神で、同じでいいではないかと思うかもしれません。

ですが、家康公および家康公の取り巻きが、秀吉と同列でいいなどと考えるわけがないのです。私のように日光東照宮で給料をもらっていたら、いかにして豊国大明神を超えた存在になるかを考えたらろうと、素直に思うわけです。明神号ではまずいのです。秀吉と同じですから。どうやって超えるかが問題なのです。吉田神道では秀吉以上の祭り方はないのです。別のものにやらせるしかないのです。

われわれ庶民ならば、死んだら子孫が祭ってくればいだけの話です。ところが、国の守り神は、やはり公の祭祀が行われなければいけません。簡単に言いますと、天皇から<sup>みことり</sup>勅を頂いてきちんとした神社に祭られないと、日本全部に影響を及ぼすありがたい神様になれません。信長は生きていうちに自分を神とあがめろと言いましたけれども、豊臣秀吉の場合は、最晩年になって、幼い秀頼を残していくけれども、自分に何ができるのだろう。いくら、家康公をはじめ、家来たちに秀頼を頼むと言ったって、当てになりません。死んでしまったら何もできないかと言いますと、そうではありません。死んだ後、神になって自分の子どもを守りたいと思うのは、人間として当然でしょう。

そうなった時に、考えていく過程で、神として祭ってもらったのなら、勝手に神になっても駄目です。天皇から認められなければ。そうしますと、秀吉を神に祭るための儀式を吉田神道でやらせるわけです。それが、朝廷が、天皇が認めた公のやり方です。当然秀吉は戦国乱世を統一して、皇室の安泰にも寄与するほどの業績を上げたわけです。ですから、最大限のやり方で豊国大明神に祭ったのです。しかし、それと同列では、徳川は困るのです。豊国大明神を超えなければ。それで考え出したのが、天海の流儀で権現号で祭ることです。明神号と違いますから。他人はどちらが上かなどと言うかもしれませんが、本人たちが、権現は明神より上ですと認めていけばいいわけですから。そのために、天海に任せることにします。

ところが問題は、天皇からその許可をもらわなければならないのです。朝廷は、歴史的に見て前例を重視します。前例にないことは、大体、拒否されるわけです。難しいことは「前例がありません」と、これをやられると、徳川としては困るのです。それで思い付いたのが、論争なのです。「徳川内部で明神や権現などと論争をして、決着が付きません。それで將軍秀忠の裁定で、権現に決まりました。だから権現号で祭ってください」、とお願いします。前例がないけれども、どうしますか。この問題で徳川幕府内はもめているのです。それを朝廷側がどちらがいい、悪いなどと言い出すと、徳川内部の論争に朝廷まで巻き込まれてしまいます。それで、「これは將軍が裁定したのですからそのまま認めましょう」と。後水尾天皇も権現号でいいでしょうということ、で、権現になります。

つまり、そのためには天海と崇伝が、いかにも論争したかのように演出せざるを得なかったのです。そのために崇伝が書き留めた家康公の遺言も、簡単にしか書けなかった。久能山に葬り、芝の増上寺で法要を行い、岡崎の大樹寺に位碑を建て、そして1年後日光に移し祭れと、単にそれだけしか書けなかった。ところが、思わぬところに証拠が残っていたのです。それが御三家の尾張と紀伊の記録です。ただし、これは後で書き直した可能性がないとは言い切れないのですが、ただ、家康公の遺言について、天海と崇伝が一緒に、2代將軍秀忠に伝えました。

その内容は「先ず久能山に葬り、三年後に日光に移し祭れ。日光での祭儀は天海僧正にやらせるように」と。尾張家、紀伊家ではそういう記録を残しているのです。

なるほどと思わざるを得ません。考えてください。家康公の大事な遺言を、將軍は直接聞いているわけではありません。崇伝や天海から聞くわけです。その時に將軍は、1人からの話だったら聞きません。天海と崇伝が2人そろって、あるいは本多正純も一緒にいたかもしれません。こういう遺言でしたと聞いたから、納得できるわけです。その中に日光での儀式は天海さんに、習合神道、後に山王一実神道と言われるような、仏教系の神道、仏教と神道の交じり合った法儀で祭るようにと、書いてあるのです。

つまり、天海と崇伝と一緒に家康公の遺言を忠実に伝えました。忠実に伝えただけでも、崇伝の日記には、天海に任せるなどは書かれなかった。それはいかにも論争したかのように装おわなければいけないからです。ひそかに伝わるようなやり方でやったわけです。それは、日光に祭った東照大権限は、天帝と一体の存在であると明言することは、誤解されかねないのです。徳川王権論になりかねませんので、皇室の誤解も生みます。皇室をないがしろにしているとも捉えかねられない要素を持っています。だから、あまりオープンにしてはいけないと。皇室をないがしろにして政権を維持するなどは、日本の歴史においては不可能ですから。ただ、ひそかに一体であるということなら、おそらく問題にはなりません。そのために徳川の血筋の娘を皇室に嫁入りさせます。そして、藤原家と同じように、天皇をサポートしていく体制なら、前例があるわけです。ですから、家康公が日光に祭られたのは、天帝と一体の存在であることは、あまり大っぴらに言うことではありません。問題はその覚悟が本人にあればいい。

ということで、一番いい場所として日光を選びました。と言うよりも、日光以外の選択肢は無かった。そのことで考えなければいけないのが、家康公には天下人の自覚があったことなのです。

天下人は天帝から選ばれた存在です。なぜ選ばれたかと言いますと、徳を持って国を治めることができるからです。そう、選ばれました。だから、徳を持ったいい政治ができなければ、天罰を受けて政権の座から追放されることになります。駄目な時は、災害が起きる、疫病がはやる、戦争が起きるなどで示されると。だから、そうならないように、平和な世の中をつくらなければいけない。秀吉はいくら偉かったかもしれませんが、政治家としてどうだったでしょうか。人間の価値は何を成したかではなくて、何を成そうとしたか、その志が、思いが一番大事であると、私は思うのです。ただし、政治家だけは別です。そういう志を持ち、なおかつ、いかなる結果を残したかが、政治家は問われなければなりません。

今、「豊臣兄弟！」がNHKの大河ドラマで放映され、また秀吉ブームも盛んになるでしょうけれども、政治家としては結果責任です。われわれは庶民の場合は、結果責任などは問われなくていいのです。何を目指したかでいいのです。例えばオリンピック選手だって結果ではありません。だから試合後のインタビューでも、どのような思いでこの試合に臨んだかが問われるのです。その思いが強ければ、純粹であればあるほど、評価してもらえるのです。でも悲しいかな、政治家だけはそれだけでは駄目です。

どのような志があっても、結果が問われます。それが政治家です。それに応えた政治家がどれだけいるのかと考えた時に、内戦を終わらせ、外国とは平和外交を続け、200年以上も平和を維持した政権を造り出した政治家は、私は家康公以外に、そう思い浮かびません。

その家康公を神に祭り世界遺産にもなっている日光東照宮ですが、もう時間がありません。せっかく用意したスライドを映せませんが、1つだけ紹介しておきたいと思います。東照宮のシンボル、陽明門の中央にある彫刻は唐子の遊びです。それも、「司馬温公の瓶割り」と言って、水がめに落ちた仲間を助けるために、かめを割って友達を助けた、命の大切さを教える話が陽明門の中央にあるのです。権力者が造った建物で、命の大切さを教える話がメインテーマになっているなどという建物は、世界中を探しても他にはありません。世界遺産が「人類の宝」なら、何をもって東照宮が人類の宝なのでしょう。まさに家康公の目指したものを理解した家光公たちが、今の日光東照宮を造る時に、メインテーマはまさに命の大切さ、戦争のない平和な世の中、子どもたちが安心して遊べる世の中、それを遊んでいる子どもの彫刻で表現したのです。あの東照宮の彫刻はそれがメインになって、それに肉付けする為にいろいろな彫刻があるのです。

つまり東照宮を造った人たちは、家康公の平和への願いを理解していたのです。そして、家康公が、自分が世の中を、将来を見守るために選んだ土地が日光だった。家康公自らが選んだのが日光だったと。そのことを基に考えてもらえば、いろいろな点が理解できてくるのではないのでしょうか。今の世界中の政治のリーダーたちに、このような生き方をした人がいますか。家康公は2代将軍に、「いささかも不道あるべからず」と、道にあらざる行いをしてはいけないと言いましたし、3代将軍には、「天下人は慈悲ぞ」と、慈悲の心を持たなければ駄目だと、教え諭しました。それで徳川幕府は260年も続いたのです。

これは思いつきですが、明治時代になって、江戸は東京と名前を変えましたけれども、江戸時代はずっと、あの江戸は江戸でしたよね。江戸は「穢土」と同じ発音で、汚れた世の中なのです。

縁起の悪い名前なのです。家康公は、なぜ江戸を改名しなかったのでしょうか。信長は岐阜に変えました。浜松は家康公が引馬から変えました。ですから、江戸などという名前は変えられたはずです。変えなかった理由は、江戸がまだ汚れている、理想が実現されていない、だから、これから「江戸を浄土のような、いい土地にするのだ」、と。だから改称しなかったのではないのでしょうか。明治新政府が東京などという名前を付けましたが、家康公の理想を、あの人たちには理解出来ていなかったであろう、という思いが私には強くします。

ちょっとオーバーですかね。すみません。勝手なことを言うと家康公から怒られそうです（一同：笑）。

時間をオーバーしています。いつも90分やっているものですから、60分でやるのはちょっとつらかったのですけれども。まとまりませんでした。あまりまとまらないほうが、やはりいいですね。「及ばざるは過ぎたるより勝れり」です。これで失礼させていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## 〔略 歴〕

# 高 藤 晴 俊 (たかふじ はるとし)

### 肩書

日光東照宮特別顧問・文星芸術大学非常勤講師

### 略歴

昭和 23 年 栃木県日光市野口に生まれる  
昭和 47 年 日光東照宮に奉職（禰宜、総務部長・文庫長等歴任）  
昭和 52 年 國學院大學大学院文学研究科（神道学専攻）博士課程単位取得退学  
昭和 60 年 黒羽刑務所・喜連川少年院教誨師（～平成 25 年）  
平成 25 年 定年により日光東照宮を退職

### 著書

『生岡山王志一日枝神社小史』	・私家版	(昭和 56 年)
『謎と不思議・東照宮再発見』	・東照宮	(平成 2 年)
『資料編・東照宮の彫刻』	・東照宮	(平成 3 年)
『家康公と全国の東照宮』	・東京美術	(平成 4 年)
『日光東照宮の装飾文様』(共著)	・グラフィック社	(平成 6 年)
『日光東照宮の謎』	・講談社新書	(平成 8 年)
『図説・社寺建築の彫刻』	・東京美術	(平成 11 年)
『近世大工の贈り物』(共著)	・三ヶ所神社	(平成 18 年)
『甲斐の東照宮信仰』	・岩田書店	(平成 24 年)
『千人武者行列一日光東照宮神輿渡御祭の全て』(写真集・共著)		
	・下野新聞社	(平成 27 年)
『天下の神廟 日光東照宮』(写真集)	・下野新聞社	(令和 3 年)
『神君家康公 日光を選ぶ』	・下野新聞社	(令和 7 年)

他に、神道・東照宮・日光関連の共著や論文多数

### 受賞歴

藍綬褒章（教誨師・平成 23 年）

### プロフィール

東照宮の建造物や彫刻の調査・研究を行い、「眠り猫」や「魔除けの逆柱」（さかさばしら）、陽明門の「唐子（からこ）遊び」等、数々の新発見や新解釈を発表し、新聞・テレビなどにも度々紹介されている。趣味の写真では「世界遺産シリーズ」等の記念切手にも採用された他、各種コンテストに入選・入賞。特に、「北辰の門」と題する陽明門の真後ろに北極星を中心に星々の回る写真は、東照宮の日光鎮座の理由を解明するものとして広く注目を集めた。〔令和 7 年現在〕

# 『神君家康公 日光を選ぶ』

(令和8・2・27)

高藤 晴俊

## 〈講演要旨〉

人は死ねば全てが無になる訳ではない。日本人の多くは、死後も魂は残り、ご先祖さま〈仏さま・祖先神〉となって、残された子孫たちを守ってくれると信じてきた。庶民の場合は子孫を守ることが期待されたが、徳川家康公は天下人であった。天下人は死後も天下の行く末に責任を感じた筈である。それで「八州の鎮守」（日本国の守り神）に祭られることを望み、その祭祀の場として日光山が選ばれたのである。

東照宮が造営された日光山側では、その造営に主導的役割を果たした天海僧正を、日光山再興の恩人として顕彰してきた。一方日光以外では、天海は己の野心のため遺言を捻じ曲げ、前例のない権現号を主張して日光遷座を強行したと誤解されてきた。しかし、これは家康公の遺志を全く無視した解釈である。鎮座地として日光を選んだのは家康公自身であり、天海はその準備のために前もって日光山に派遣されていたのである。

金地院崇伝の日記や、徳川御三家の尾張・紀伊家の記録によれば、公の遺言は「先ず久能山に神葬し、その後天海の主導で日光山に神仏習合の法義で神祭せよ」との事であった。では、家康公は何故日光山を選んだのであろうか。日光が様々な好条件に恵まれていたことは言うまでもないが、筆者は日光山が江戸の真北に位置していたことが最大の理由であったと考えている。

戦国武将たちは、戦の勝敗も、人の生死も、「天」（天帝・天道）の配剤であり、天下を取るのも、天のしからしむるところと考えた。古代中国以来、帝都を貫く南北軸は、「皇帝」が「天」より地上世界の政治を委任されたことの表象であったように、北極星と江戸城を結ぶ宇宙軸の線上に東照宮が位置することは、家康公が築いた徳川政権の正統性を暗示していたのである。

家康公が「厭離穢土・欣求浄土」の旗印を掲げたことは良く知られているが、これは死後に極楽浄土を求めるのではなく、この世を浄土に造り替えようとの決意を示したものである。家康公の宗教観は、一宗一派に偏することなく、国家運営・人心安定のために各宗教を尊重し、保護した。天下は「お預かりしたもの」と考え、私するのではなく「天下は天下の天下」であるとし、秀忠には「些かも不道あるべからず」、家光には「天下は慈悲ぞ」と諭した。

林羅山によれば、藤原惺窩が「世の乱れを厭う天が選んだ真の君主が現れる」と説くのを聞いた家康公は、これこそが「治国平天下の要道」と理解し、儒教（儒学）の教えを国政に活かそうとされた。その一環として京都五山の僧たちに『論語』中の「政を為に徳をもってすれば、譬えば北辰の其の所に居て衆星の之を<sup>めぐ</sup>共るが如し」という一文を題材として作文を命じたが、崇伝や林羅山も文を添え、何れも家康公を北極星に擬える文章を草している。

天命を受けて江戸に幕府を開いた家康公にとって、北極星の方角に位置する日光山は、死後も自らの魂を留めるべき地に相応しいと思はれたであろう。しかもこの地の伝承によれば、弘法大師空海が「二荒山」を音読し「日光」の嘉字を当た銘記すべき時に、北極星の化身の玉が出現し、この世が乱れ自分が必要な時には再び出現すると約束された、正に「約束の地」で、あったと言

えよう。

結果責任が問われるのが為政者の宿命であるが、人間としての評価は「何を為そうとしたか」にあらう。従って、家康公が日光を選んだその真意の理解は、我が国の歴史や宗教、そして政治思想を知る上からも、疎かにすることの出来ない意義を有するものと考えられよう。

日光山が江戸幕府至高の聖地となると、その影響は周辺地域にも及ぶことになる。逐一の検討は筆者の良くするところではないが、日光道が五街道の一つに位置付けられたのも、宇都宮が日光道から分かれて奥州道の起点となったのも、更には、例幣使道などの脇街道を含めて、周辺の宿場町の成立・発展の歴史も、東照宮の日光鎮座と無縁ではなかったろう。

## 《参考史料》

### ● 家康公の遺言

#### ○ 『本光国師日記』

一兩日以前、本上州、南光坊、拙老、御前へ被仰置候ハバ、御体をば久能へ納、御葬礼をハ増上寺にて申付、御位牌をハ三州之大樹寺ニ立、一周忌も過候て以後日光山に小き堂をたて、勸請し候へ、八州之鎮守ニ可被為成との御意候

#### ○ 徳川義直編『東照神君年譜』

四月小 七日、僧正天海・以心長老（崇伝）葬送之命、告於秀忠君、二僧伝公之言目、万歳之後、必当以神力擁護子孫、鎮撫邦家、準大織冠（藤原鎌足）子孫繁栄之例、殯斂已畢、先葬久能山、以榊原内記照久為神職、受頼将（徳川頼宣）之奉祭而、三年之後、当改移下野国日光山其祭享之式、依両部習合神道并宜任天海之指也、

### ● 「慶長十九年林道春及五山衆試文稿」（南禅寺文書）

#### ○ 「題」 子曰、為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之。（『論語』）

#### ○ 「序」 金地院崇伝

天に五星あり、地に五行あり、人に五常あり。衆星の中、北辰を以て至尊となす。……独り天の中央に居て、動かず映らず、……名づけて北極という。……政を為すに徳を以てす。徳は万物の性、……天命これを性という、……徳を施し政を施せば、寸歩も動かさずして天下を御す。……四海を掌し、万邦帰伏し、異域来享す。戈を動かさずして、坐して太平を致す……。

#### ○ 「文」 東福寺令柔

為政の初章を以て君の政徳に擬すれば、則ち、君は北辰にして、北辰は即ち是れ君なり。

○ 「文」天龍寺玄光

北斗の衆星の王たり。有徳の君主の世に於けるや、猶ほ、天の北斗の其所を動かざることし。誰か之を仰がざらんや。

○ 「駿」林道春（羅山）

駿府は鎮東の天府、駿城、惟れ民の向かう所、惟れ人の仰ぐ所、三光とその明を同じくす。

● 『日光山滝尾建立草創日記』

それ滝尾は加美能天皇（嵯峨天皇）の御願、……空海僧都の建立なり。……沙門勝道の歴山の銘を請ふことあり。これに依りて和尚、……弘仁十一年七月廿六日、当山に下着、……山を二荒と号す。和尚……改めて日光山と云う。……。

離布畏岩（現・仏岩）より北方に去ること十八九町、一滝有り……八葉の蓮池あり。和尚、結壇して仏眼金輪の法を修せり。……池の水を分けて一白玉出生せり……「我は是、天補星なり」と。……寺中に建興して王子となし小玉殿と号せり。次に呪を誦し神を召請するに、池中に白玉現はれり。……「我は是、妙見尊星なり。……我を以て、中禪寺に安住せしめ給へ。末代の時、……我は寺中に還居して、人法を守護し怠慢を禁ぜんと云々。」

# 世界遺産・日光の社寺

## 登録資産

日光の社寺は、東照宮・二荒山神社・輪王寺及びそれらの境内地からなり、その中に国宝9棟・重要文化財94棟の計103棟の建造物群が含まれ、登録遺産（コア・ゾーン）の面積は約50ヘクタール、周辺の緩衝地帯（バッファー・ゾーン）約373ヘクタールに及ぶ。

## 主な資産（◎国宝・○重文・☆附）

- 東照宮 ◎本殿・石の間・拝殿、◎正面・背面唐門（2棟）、◎東西透塀（2棟）  
◎陽明門、◎東西回廊（2棟）  
○上社務所、○神楽殿、○神輿舎、○鐘楼、○鼓楼、○上神庫、○中神庫、  
○下神庫、○水屋、○神厩、○表門、○五重塔、○石鳥居、○坂下門、  
○本地堂、○輪蔵（経蔵）  
（奥社） ○奥社宝塔、○同唐門、○同石玉垣、○同拝殿、○同銅神庫、○同鳥居、  
○同石柵、○旧奥社唐門、○同鳥居  
（御仮殿） ○仮殿本殿・相の間・拝殿、○同唐門、○同掖門・透塀（2棟）、  
○同鳥居、○同鐘楼  
（御旅所） ○御旅所本殿、○同拝殿、○同神饌所  
（附） ☆鐘舎（朝鮮鐘）、☆灯台穂屋（吊灯笼）、☆灯台穂屋（回転灯笼）、  
☆銅神庫（銅庫）、☆渡廊（素木廊下）、☆銅庫門及び板塀、  
☆非常門及び銅板塀、☆内番所、☆西浄、☆東通用門（社家門）（10棟）

計 42 棟

- 輪王寺 ○三仏堂、○相輪棠、○本坊表門、○開山堂、○常行堂、○法華堂、  
○常行堂法華堂渡廊、○護法天堂、○観音堂、○三重塔、○兎玉堂  
（大猷院） ◎本殿・相の間・拝殿  
○唐門、○瑞垣、○掖門、○御供所、○御供所渡廊、○夜叉門、  
○回廊（2棟）、○鐘楼、○鼓楼、○二天門、○西浄、○水屋、○宝庫、  
○仁王門、○皇嘉門、○銅包宝蔵、○奥院宝塔、○同鑄拔門、○同拝殿、  
○別当所龍光院  
（慈眼堂） ○慈眼堂廟塔、○同拝殿、○同経蔵、○同鐘楼、○同阿弥陀堂

計 38 棟

- 二荒山神社 ○本殿、○唐門、○掖門・透塀（2棟）、○拝殿、○神輿舎、  
○鳥居（3棟）、○神橋  
（別宮） ○滝尾神社本殿、同唐門、○同拝殿、○同楼門、○同鳥居  
（別宮） ○本宮神社本殿、○同唐門・透塀、○同拝殿、○同鳥居  
（末社） ○大国殿、○朋友神社本殿、○日枝神社本殿

計 23 棟

総計 103 棟（113 棟）

## 世界遺産としての価値（i・iv・viに該当）

- ①建造物の多くは、17世紀の日本を代表する天才的な芸術家の作品であって、高い芸術的価値を有する。
- ②東照宮と大猷院は、近世宗教建築の「権現造」の形式の代表例であり、また、その建築群は、日本の古い形態の建築様式を知るうえで重要な見本ともなっている。
- ③日光山内は、将軍の社参や、朝廷からの例幣使の派遣、朝鮮通信使の参拝などが行われ、江戸時代の政治体制を支える重要な歴史的役割を果たした代表的な史跡である。  
また、建造物群をとりまく自然環境と一体をなしており、文化的景観の頭著な事例である。

## 登録が遅れた理由

日光の社寺は、平成4年に文化庁が発表した暫定リストに載るが、山内の史跡指定がなされていなかったために登録が遅れ、10番目となった。日光杉並木街道については、検討したが未解決の問題が多いため、今回の推薦には含めなかった。追加登録すべしとの声が上がっている。

## 史跡指定問題

東照宮などのある日光市山内については、昭和30年、国の文化財保護審議会が指定を答申した。東照宮は賛成の立場を取ったが、反対するものもあり指定出来なかった。

反対の主な理由は、社寺は国の文化財に指定されており、また、該当地域は国立公園の中にあり、保存管理の体制は整っている。地域内には一般住民が暮らしており、これ以上の規制が加えられると、日常の生活にも支障をきたす、というものであった。

文化庁は、その後も何度も指定の問題を提起したが、指定出来ずにいた。世界遺産の暫定リスト発表後、日光の社寺の世界遺産登録推薦には、史跡指定が前提条件であることが認識され、漸く史跡指定を受け入れた。

## 登録推薦の条件（日本の文化遺産の場合）

- ①建物場合は、国の文化財の指定を受けていること
- ②指定物件の存在する地域が、史跡の指定を受けていること

## 推薦書の内容（日光の社寺の場合）

- |               |                                      |
|---------------|--------------------------------------|
| ①資産の特徴        | 名称・所在地・資産範囲・緩衝地帯。                    |
| ②登録の価値証明      | 登録基準に合致する資産の価値の説明など。                 |
| ③資産の内容        | 現況・歴史・具体的な物件の逐一の説明。整備・活用に関する施策・計画など。 |
| ④資産の管理状況      | 法的な位置づけ。管理計画の内容。保存技術など。              |
| ⑤資産へ影響を与える諸要素 | 開発・環境悪化・自然災害・観光による影響の有無とその対策など。      |
| ⑥モニタリング体制     | 管理体制・保存状況の測定の指標や調査項目など。              |
| ⑦史料           | 物件の写真・ビデオ、管理計画など。                    |

## 日光山の史跡指定の主な理由

- ①宗教的霊地として、8世紀末の日光開山以来、1200年の歴史を有し、古くから山岳信仰の聖地となり、自然環境と一体となって、神道・仏教・徳川家墓所の複合した宗教的霊地としての日光山の歴史を現在まで継承している。
- ②徳川幕府の創立者である徳川家康を祀る東照宮が造営されて以後、日光山は江戸時代の政治体制を支えるための極めて重要な歴史的役割を果たした。
- ③明治初年の神仏分離実施以後も、日本宗教の特質である神仏混交の歴史を現す顕著な事例である。
- ④古代以来の日本的宗教空間を継承し、神道や仏教をはじめとする宗教儀礼や行事が受け継がれ、市民の生活や精神の中に文化として生き続けている。

## 日光山の歴史的役割（主なもの）

### \* 将軍の社参

元和3年以降、計19回。日本の歴史上最大規模の行列。秀忠4回、家光10回、家綱2回、吉宗・家治・家慶各1回。将軍は、岩槻・古河・宇都宮・壬生の各城を宿泊。御三家を始め諸大名もお供をして参拝。国家的大行事である。

### \* 例幣使の参向

朝廷よりの奉幣使（勅使）。元和3年以降、特別の年に参向。正保4年（1747）からは毎年（例幣使）。江戸期では日光と伊勢だけに派遣された。一行は約50人。沿道の各地に京都の文化を伝播。通行路のうち中仙道倉賀野宿からは例幣使街道の名がある。

### \* 朝鮮通信使参拝

江戸時代を通じて12回来日。一行の人数は500人程。日朝の文化交流に大きな役割を果たした。日光には寛永13・同20・明暦元年の3回参拝。東照宮で朝鮮式の祭祀を行うなど、極めて特異な意味を有する。その時の、釣鐘や灯籠などの進物が現存。

### \* 琉球使節参拝

王国体制を残したまま薩摩藩の支配下に置かれ、王の襲祚（恩謝使）と将軍の襲職の際（賀慶使）に遣使。江戸時代を通じて18回「江戸上り」をしている。そのうち正保元年（1644）、慶安2（1649）、承応2（1653）の3回、薩摩藩主の引率で東照宮と大猷院に参拝。銅製花瓶や香炉等を献上。行程は朝鮮通信使に同じく、糟壁（春日部）・小山・宇都宮・今市宿に宿泊。一行は百人前後、薩摩藩士が先導・警備に当たった。

### \* 諸大名他の参拝

幕府は諸大名や旗本等の東照宮参拝を奨励。各大名は山内に宿坊を定め、その領民も同坊を利用する。旗本以下の幕臣や江戸の町民は町内に止宿した。元禄期の東照宮の記録には1日5千人、10日間で数万に上るとある。

### \* 造営物資の運搬と工人の通行

元和創建以降、造営工事のための往来は、街道や宿駅の整備、また周辺の町村に経済的・文化的に多大な影響を与えた。当時、東照宮の造営や修理に携わることは職人のステータス・シンボルであり、建築資材の産地では、それがブランドとなった。

\* 日光火之番八王子千人同心の赴任

家康公によって召し抱えられ、甲州口の警備のために八王子に配置された旧武田家の遺臣「千人同心」は、大猷院創建時に「日光火の番」が命ぜられ、日光山内の防火・防災の任に当たった。町内に火の番屋敷があり、定期的に山内を巡回。我国の常備消防として特異な存在。慶安5年（1652）、当初は2組100人が50日交代。寛政3年（1791）に1組50人が半年交代となり、慶応4年（1868）まで216年間続いた。

\* 尊徳仕法の実施

江戸後期、日光神領内の農地荒廃の復興のため、農政家の二宮尊徳を幕府が招請。嘉永6年（1853）から始まり、安政3年（1856）尊徳没後は子息の弥太郎が引き継ぐ。

尊徳葬送の地（日光市今市）には墓所と二宮神社が建立された。

\* 戊辰戦争

慶応4年（1868）4月29日、日光山に籠もる旧幕府軍と新政府軍が日光・今市の境で対陣。日光を戦火から守るための交渉が成立し、旧幕軍は会津へ転進、新政府軍は今市へ退去。これ以後、主戦場は会津へ移るが、神領地域内では、なお戦闘は継続した。

## 東照宮のコスモロジー

何故、東照宮は日光に創建されたのか？ その根底には壮大なコスモロジー（宇宙論）が秘められていた。しかし、これまで、東照宮、或いは徳川政権に対する偏見があったことと、東照宮の創建が「徳川家康を尊崇する人々の手によってなされた」と言う、自明の事実を無視したために、重大な点が見落とされていた。

- ◎ 幕府建立の東照宮
- 〔遺言〕 日光・久能山（元和3年建立）
  - 芝増上寺（安国殿）・岡崎大樹寺
  - 〔秀忠〕 江戸城内（元和4年）
  - 〔家光〕 世良田・鳳来山・岡崎（滝山）・上野寛永寺

◎ 主要東照宮社殿の方位と配置

久能山東照宮	本殿	=	南南西向	拝殿	←○→	神廟
	神廟（墓）	=	西向	○→		鳳来山・岡崎・京都
	社殿の軸線	=	北北東	○→	富士山	→ 世良田 → 日光
日光東照宮	本殿	=	南向	(江戸)	←○→	北極星
	奥社（墓）	=	南向	(江戸)	←○→	北極星
	社殿の軸線	=	北北西	江戸	←○→	本殿 → 奥社
江戸城紅葉山東照宮		=	北西	○→		世良田
同 天守閣		=	南向	○→		日光

◎ 徳川家康と北極星（天道思想）

☆ 「慶長十九年五山衆試文稿」（南禅寺文書）

京都五山の僧 18 人に「為政以德。譬如北辰居其所而衆星共之」（『論語』）を題材にした作文を命じる。彼らは、天道思想を背景に家康公を北極星に見立て、徳川政権を讃えた。これらの詩文に、崇伝と林羅山が序と跋を加えた、20 編の詩文からなる。

◎ 星辰信仰 一般に、我が国では星辰信仰は希薄であったとされてきたが、それは全くの誤解で、特に、天皇の存在や「治天下」の思想、権力者としての「天下人」の名称など、極めて重要な位置を占めていた。

北極星 妙見・太一・北辰と称し、諸星の中心であり、天皇大帝（天帝＝宇宙を支配する神）の住居とも、天帝そのものとも考えられた。

北斗七星 古代にあっては、天帝を助ける臣下とされた。また、天帝の乗る車とも考えられ、天帝はこれに乗って宇宙を巡るとされた。山王神道では「天に在りては七星と名づけ、地に在りては七社明神と号す」（『溪嵐拾葉集』）とあるように、山王七社に見立てられた。

斗（杓）と柄の七星の内、一番目を「魁」、六星を「文昌星」と称し、学問を司るともされた。

一般には、一番目から貪狼・巨門・禄存・文昌・廉貞・武曲（輔星）・破軍と呼ばれた。破軍星は「劍先」とも称し、この星が指し示す方角によって時間（夕刻、春は東天に上り、秋は西天に沈む）を知った。

輔星 北斗七星の6番目の星の脇にある星で、西洋では16世紀頃に発見されたが、東洋では古代から知られており、例えば現存する世界最古の天文図であるキトラ古墳の石室の天井画にも描かれている。

「妙見の輔相」また、「妙見と北斗、並びに輔星は一体分身」（『覚禅鈔』）と考えられ、摩多羅神と習合された。

摩多羅神は人の生死を司る神とされ、輔星の光が弱々しい時は生命に危機迫ると判断された。

本命星 人々の運命を司る星で、一般の人は生まれ歳に応じて、第一星から順に子・丑・寅と、七星の一つが配当された。但し、天皇のみは北極星を本命星とした。

本命星を祀る儀式を属星祭と称し、長寿を祈った。

金星 求聞持法（記憶を高める呪法）の本尊とされ、虚空蔵菩薩に習合され、一

般には知恵を授ける神と考えられた。明星信仰

二十八宿 月の所在と星座の関係から、宇宙を28に分割する。  
四宮（青龍・白虎・朱雀・玄武）を七分割したもので、月は1日に1宿を移動するとし、これを「一月」とする。

◎ 天道思想 地上の支配者として天帝から選ばれたものが天下人で、これに、相応しくないと判断されると、天帝は命令を改め（革命）るので、政権の座から追放されることになり、これを天罰という。このような考え方を「天道思想」と呼び、この思想は戦国時代から江戸時代の武将達に信奉された。

〔関連用語〕

- ※ 天道＝一般には天地自然の道理、宇宙の法則を意味する。
- ※ 皇帝＝皇は美しくて大なること、帝は徳の天に合する意。  
天下人の称号として秦始皇帝が使用。
- ※ 天皇（すめらみこと）＝天皇大帝の略、我が国では大和朝廷の大王の呼称として6世紀頃から用いられた。
- ※ 天子＝天帝の子
- ※ 天帝の座である宮殿を紫微垣と呼び、それで天子の宮殿（我国の所、中国の故宮、朝鮮の宮殿など）もこれに倣って北を背にして建てられた。  
＝「天子南面」（北を背にして座すことが秩序の根本）
- ※ 大極殿（天皇の公式の場）・紫宸殿（天皇の私的な居処）

◎ 東照宮の相殿神

相殿神	山王神（山王七社）・摩多羅神（正体不明）
三幅対の御画像	左右の山王・摩多羅神に北斗七星（＋輔星）を描く
見立て	東照大権現（北極星）・相殿神（北斗七星・輔星） → 御神像を祀る祠を御空殿と称し、周囲には28宿を描く

☆ 明治の神仏分離により、祭神名の変更が命じられ、山王神は豊臣秀吉、摩多羅神は源頼朝となった。

◎ 日光と星辰信仰

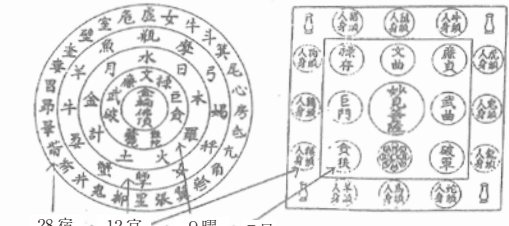
勝道上人	日光開山 明星天子（金星）の導きにより出家、更に日光開山を志す。 大谷川を渡るために聞持呪（求聞持法）を修し、出現した深沙大王の助け「神橋伝説」で日光山に至る。後、明星天子を祀る星宮と深沙王を祀
------	---

る深沙王祠が建てられる。

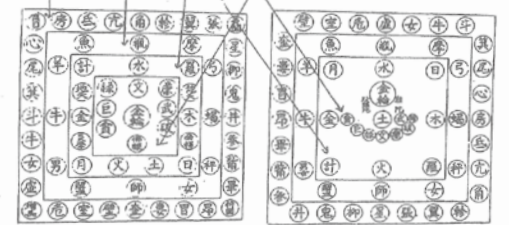
弘法大師

日光改名


真言宗の開祖。高野山を開き、勝道上人の伝記(『沙門勝道歴山瑩玄珠碑』)を著す。伝説では、来晃の折り滝尾神社等を創建し、二荒山を日光山と改めたとされる。その時、滝尾に妙見尊星と天補(輔)星が大小二つの玉となって出現したと伝える(中禅寺妙見堂・小玉堂の由来)。




28宿・12宮・9曜・7星




星曼荼羅のさまざまな型、右上は妙見曼荼羅（密教占星法より）





山東嘉祥県 武梁祠画像石の北斗星君（拓本 石案所載）  
後漢元嘉時代 斗柄の第二星に翼人が輔星を捧げている。

北斗星君は雲上の帝車に坐し、群臣の礼拝に答えている うしろの三神人は三公らしい 中国で古来星を円て表わし、線でつなぐ例としても優秀である



法隆寺の七星剣

文昌星							斗魁	27
α	β	γ	δ	ε	ζ	η	斗魁	北斗七星 (大熊座)
星	星	星	星	星	星	星	星	名称(仏教)
午	巳未	辰申	卯酉	寅戌	丑亥	子	斗魁	中配された二支
金	木	土	水	火	水	火	斗魁	五行の性
午年生	未年生	申年生	酉年生	戌年生	亥年生	子年生	斗魁	人々の本命星
光緒	陽曆	福玉	禧天	瑞天	輪天	福天	斗魁	中国の名称
一九	四八	二一	一七	一〇	二四	三五	斗魁	等星の

参考資料




図5 日光山内略図

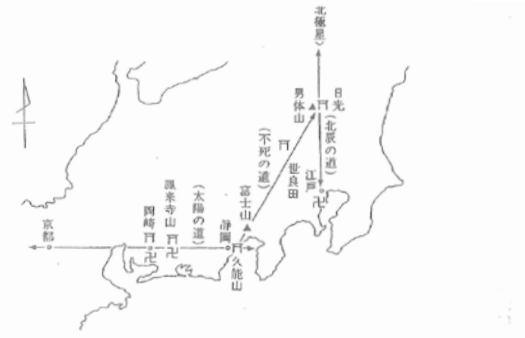


図1 東照宮鎮座地方位概念図




図2 日光東照宮境内略図




図3 久能山東照宮境内略図

参考資料

## 基調講演

②

# 「歴史資源を生かした広域観光振興」

日光市長

瀬高 哲雄 氏



皆さま、こんにちは。ご紹介いただきました、日光市長の瀬高です。高藤先生からバトンを頂きまして、非常に興味深く聴かせていただきました。日光は歴史文化の街ですので、日光東照宮を含めた二社一寺、さらには、日光市の歴史や文化を深く研究されている方がたくさんいらっしゃって、私も講演で色々なお話をお聴きしたことがありますけれども、高藤先生の話が一番面白いです。今日、高藤先生のお話は1時間で、本来であれば、1時間半は、ぜひ皆さんにお聴きいただけたらと思ったのですが、時間の都合もありますので、私からはここからの20分間をお預かりして、高藤先生のお話と、この日光市の歴史を基に、日光市として二社一寺のみならず、この歴史資源を生かして、今、どういう日光市の観光行政の現状を迎えているかを短くまとめさせていただきたいと思っていますので、お付き合いいただきたいと思います。

ご紹介いただいたとおり、まず、私のプロフィールですが、昨年5月に、市長に就任をさせていただきました。私の大きな施策としては、やはりこの日光市の観光を基幹産業として、まだまだ発展させていきたいという思いです。細かい数字は後で出てきますけれども、今、日光市は1,000万人を超えるお客さまに来ていただいています。関東で言えば、箱根が約2,000万人、鎌倉が約1,500万人です。京都まで行きますと、約5,000万人がいらっしゃっています。私の一つの目安としては、日光市の観光客入込数ピーク時の1,200万人を目指して観光行政、観光振興を図っていききたいというところです。

次に日光市の概要です。これも皆さん、栃木県のご出身の方で意外と知らない方がいらっしゃるのですが、日光市は栃木県のほぼ4分の1の面積を占めます。全国で3番目に広いです。ちなみに、面積は「約1,450 km<sup>2</sup>」とありますけれども、一番広いのは岐阜県の高山市です。2番目が静岡の浜松市です。そして日光は全国で3番目、4番目が北海道の北見市です。

我々行政からしますと、正直なところ、面積が広いのはメリットデメリットがあります。あえてデメリットをこの場でお話させていただければ、やはりインフラの整備は、広ければ広いほどコストがかかりますので、日光市の財政としては非常に厳しい状況を迎えています。道路や橋の

更新、老朽化もそうですし、今問題になっている上下水道も、やはり日光市全てをしっかりと整えていかなければいけませんので、やはり広いとコストがかかってきます。ただ一方で、まさに今日の話になりますが、観光の視点ではこれだけ広いので、歴史資源も含め、とにかく日光市は全国でもトップクラスの観光資源を有しているということで、やはり観光のメリットで言えば、これはすごく大きいと思っています。

日光市は、観光のエリアが5つに分かれます。2市2町1村が合併した時の各地域に分かれるのですが、旧日光エリアは、今、高藤先生がお話していただきました日光東照宮を中心に、世界遺産登録になっています日光山輪王寺、さらに日光二荒山神社もあります。そして神橋です。ここがやはり日光市の観光の大きな核になっています。さらにいろは坂を上がりますと、日光国立公園のメインとなる中禅寺湖、戦場ヶ原がある奥日光エリアへと入ってまいります。戦場ヶ原はあのラムサール条約湿地にも登録されており、これから5年後、10年後の日光市の観光を考えますと、もちろん歴史資源も非常に重要なのですが、いわゆるこの奥日光と言われる地域は、大きな顔になってくると思っています。

実際にご存知の方もいらっしゃると思いますが、知事が公約で、いろは坂に新交通モビリティシステムを導入するというので、今、地元と、民間事業者を入れて、導入に向けて、前に進めようとしているところです。この他にも、数年前にリッツカールトンという本当にブランド力の高いホテルが入ってきていただいたほか、ここ数年のうちで、ハイクラスの高級ホテルが中禅寺の周辺にできる予定になっています。ですので、ここ数年で本当に、このエリア周辺の観光環境がガラッと変わって、いわゆるラグジュアリーな、高級リゾートの顔になってくる、日光市の顔になってくるのが、この中禅寺、奥日光であると思います。

この他にも、鬼怒川・川治エリアは、ご存知のとおり東京の奥座敷と言われている鬼怒川温泉があります。そしてさらに奥に行きますと、川治温泉です。各テーマパークもそろっています。そして、足尾エリアです。これは意外とまだ知られていないのですが、昨年、足尾銅山記念館がオープンしました。ここでは、銅山を中心とした足尾の光と影と言われていることを紹介しています。光の部分で言うなら、近代産業を引っ張ってきたのは、今の足尾銅山と言われていることで、その創業者である古河グループの功績を示した記念館であります。これも銅山観光とあわせ、足尾の大きな観光資源になるものです。この他、今度は鬼怒川・川治エリアからさらに奥に行きますと、湯西川・川俣の温泉郷があります。そして現在、日光の中心は今市にありますけれども、ここでメインとなるのは日光杉並木街道です。この後少しお話しますが、昨年植樹400年記念を迎えまして、各種イベントを開催させていただきました。

このように、合併前の各基礎自治体において、一つひとつ、ポイントとなる観光資源がたくさんあります。歴史の資産、温泉、テーマパーク、さらに自然と、これだけ多くの観光資源を基礎自治体として有しているのは、全国でも日光がトップクラスと自負をしているところです。

次に、実際の日光の観光客入込数です。コロナ禍で一時的に減少しましたが、一昨年、やっと1,000万人を超えました。一番の速報値で、昨年（2025年）の1月から12月までの入込数は、前年度よりも50万人ほどプラスになる見込みです。おそらく1,070万人ぐらいまで回復してくるの

ではないかと思えます。ただ、ピーク時の入込数は1,200万人を超えていますので、冒頭でお話をしましたとおり、まずは直近でこの1,200万人を一つのベースに、さらに観光の振興を進めていきたいのが、当市の現状です。

次に、宿泊客数です。これは、実は日光市の一つの課題でもあるのですが、去年は290万人のお客さまにお泊まりいただきました。これも一昨年から昨年と、さらに数字は上がっています。上がっていますけれども、この部分はまだ伸びしろがあると言われていています。やはり、日光市のこの宿泊数がなかなか戻らないのは、都内から日光へ行って、その日のうちに帰ることができるというところなんです。交通条件が逆にいい分、帰ってしまうところが一つの要因です。あとは、夜のお店や飲食店が非常に少なく、滞在時間が短くなってしまっているところも、一つ、課題で挙げられているところです。

加えて、外国人の宿泊客数です。これも先ほど、全体では今、290万人と言われてはいますが、そのうちインバウンドのお客さまが、14万人しかいないのです。これはやはり全体の数字からしても、外国のお客さまはどんどん増えて、右肩上がりなのですが、宿泊客数としては足りない部分があります。いかに、このインバウンドのお客さまにも滞在をしてもらうか、さらには、日光市の歴史資源も含めて、国内、世界にいかにも魅力を発信をしていくかです。昨年、私はタイにトップセールスに行かせていただいて、今年は台湾に行く予定です。日光市のしっかりとした歴史資源観光資源を、世界に発信をしていきたいと思っていますところです。

今、当市の宿泊客数の水準は、去年の294万人です。ちなみに、栃木県全体でどういう数字かと言いますと、那須町で202万人、宇都宮で189万人です。これは栃木県で言えば、日光を含めベスト3です。このうち外国人の宿泊者数は、日光市では今、申し上げたとおり14万人です。宇都宮で6万人、那須町で1万5,000人です。

では、日光市で、どの国からのお客さまが多くお越しにいただいているかと言いますと、第1位がこの台湾です。2位が中国本土です。3位がアメリカです。実はここには隠れていますが4位には、昨年私がトップセールスに行かせていただいたタイが入ってきています。今、国際関係も含めて、中国のお客さまがなかなか日本に来ていないというお話ですけれども、日光に関しては、一度、少し前にも中国との関係が悪化して、団体のお客さまが一切来なくなったことを実は経験しているのです。ここ数年で、もうすでに、各事業者はその時点でお客さまが分散化をしているものですから、日光市に関してはこの中国のお客さまが、今、日本に来ていない影響はかなり少ないです。リスク管理は、もうすでに日光市に関してはしっかり出来上がっています。当然、ゼロではありません。ゼロではないのですけれども、そこまで大打撃を事業者に与えるようなほどの、この今の観光に関わる悪化は、日光市においては影響がないのが現状です。

日光の観光の一つの強みは、まさしく今日のテーマである歴史です。いわゆる文化資源、歴史資源があるのは圧倒的な強みです。これはぜひ資料を見ていただきたいのですが、何のホームページかと言いますと、日本政府の観光局で最初にボンと出てくる絵です。これは今、日本語ですが、英語なら英語、他の各国の言葉にも変わって出てくる地図です。これを上からずっと見ると、東京や福島、青森を含めて、都道府県名です。日光市は、単独で名前を出していただ

いて、海外に宣伝していただいています。なぜ日光市が単独で出ているかと言いますと、伊勢志摩なども単独で出ていますが、これはやはり、ただ自然や、いわゆるテーマパークの部分のみならず、今日のテーマでもあるこの歴史です。自然を含めてのこの強みが、圧倒的に日光としてはあります。これが海外に売り込む一つの大きな強みで、あえて、この日光を単独で地図に載せていただいているところです。

実際に、どう紹介していただいているかと言いますと、「壮大な建築」そして、「長い歴史、ありのままの自然が融合する場所」と、日本の観光局が紹介しています。これは、圧倒的な歴史の資源がある観光自治体としての強みが、特徴になっていると思っています。

次に、これは少し古い情報なのですが、外国人のお客さまが選ぶ日本の観光地ランキングです。これはいろいろなランキングがあります。旅行会社や雑誌なども含めてそうですし、それぞれ国が出しているものもありますし、いろいろなランキングがありますが、この2020年の「訪日ラボ」で見ますと、1位、2位、3位、4位、5位と歴史的な建造物のあるところですよ。伏見稲荷などもそうですし、奈良の東大寺、そして兼六園です。日光市は、全国でこの日光東照宮が7番目にランクインしています。これが一つ、本当に大きな強みというところがあります。これぐらい、外国人の観光客のお客さまにも選んでいただける強みが、この日光市にはあるということです。

「日光の社寺」が世界遺産登録になりまして、25周年を一昨年を迎えました。歴史・文化施設のみならず、やはり世界遺産に登録されている強みも、正直、圧倒的に価値があると思っています。先日も首長の座談会がありました。ある雑誌の収録だったのですが、富士山を有している富士宮市、それに奄美大島の奄美市、あとは金山と、トキがいる佐渡市です。この4人の首長で、世界遺産の座談会をやりましょうというお話があったのです。世界遺産を抱えている自治体として、いわゆる今日、高藤先生がしていただいた徳川家康にまつわるお話ではないですが、「自然」の世界遺産と「歴史、文化」に関わる世界遺産には違いがありました。もちろん、自然遺産は大変素晴らしいと思いますけれども、歴史・文化には、ストーリーがあります。今、観光は、お客さまはストーリーを求めるところもありますので、日光東照宮、徳川家康にまつわるこのお話はストーリーがあって、ロマンがあります。実際にそれを聞いて、生で見るといって歴史文化は、圧倒的に世界遺産の中でも、非常に強いものがありますし、日光市の、最大の強みと実感をしています。「日光の社寺」世界遺産登録25周年も本当に多くのお客さまにお越しいただきました。

もう一つ、昨年、世界遺産登録25周年に合わせて、日光杉並木の植樹も400年を迎えました。松平正綱公が、約20年の歳月をかけて植えたという日光杉並木街道です。この杉並木街道は、国の特別史跡と特別天然記念物の二重指定を受けています。これは日本でここだけです。かなり特異なものになっています。私も実は、市長になる前から、この杉の「並木守」という県の事業で、ボランティア活動をさせていただいています。杉並木のごみ拾いや、草刈りなどをやる事業で、ボランティア団体を県がつくっていて、私も登録をしています。

このボランティア団体のすごいところは、ちょっとお恥ずかしい話にもなりますが、そのボランティアのメンバーには、地元の方が少なく、市外の方、さらには県外の方がたくさんいらっしゃるのです。私が同じグループでやっている方たちと色々とお話をさせていただきますと、や

やはりこの杉並木の価値は、地元の方たちよりも、外からこの日光市に来て、杉並木を歩き、歴史を知って、そこにまた結び付いている日光東照宮の歴史に惚れ込んで、ぜひ自分もこの杉並木の保護活動をボランティアとしてやりたいという方たちが、たくさんいらっしゃいます。この部分においても、この日光杉並木街道、さらには日光東照宮の価値は、逆に言えば、市外県外の方たちにより、より一層価値があるものになっていると、私も肌で感じているところです。

結びになりますが、この後、パネラーとして私もお話をさせていただきますけれども、今日の一つのまとめをさせていただきます。この観光資源を、歴史の文化資源を生かして、どう広域の観光の仕組みをつくっていくか、連携を図っていくかということが重要になります。日光市の観光としては、昨年、宇都宮市さんと連携を図らせていただきまして、MICE 誘致の取り組みをスタートさせています。これは、各団体の会議はライトキューブで開催し、アフター観光は、ぜひ日光市にお越しいただくという連携になります。今日は、宇都宮市の職員の方もいらっしゃっていますけれども、やはり大谷、宇都宮にも美味しい食べ物がたくさんありますし、大谷の観光が今、どんどん伸びていて、素晴らしいと思っています。しかし、会議を含めてのトータルで考えると、開催地へ人を呼び込む、アプローチする材料が少し少ないと感じています。そこに日光市の観光を加えることによって、より強みのあるこの MICE 誘致ができるのではないかとということで、日光市と宇都宮で連携を図り、この取り組みを実際にやらせていただいています。これが、今後、広域連携の一つのモデルケースになると思っていますし、この後のパネルディスカッションでも、他の自治体とどういう連携を図れるかというお話をさせていただきたいと思っています。

ただ、あえて最後にお話させていただきますが、日光市はもともと「殿様商売」と言われてきました。聞いたことがある方もいらっしゃると思います。日光東照宮をはじめとする二社一寺がありますので、何もしなくてもお客さまが来る地域であり、「日光市」は「日光市」ですという考え方が、もともと根底にあったのです。これはもう有名な話ですから、地元でよくお酒の席などで、昔話で出てくるのですが、40年か50年前には、お店の会計の隣に段ボールがあって、お客さまがどんどん来ると、札束をその段ボールに入れて足で踏みつぶしながら商売をしていたぐらい、儲かっていたという時代があったのです。そして、夜になると段ボールに詰まった札束を持って夜の店に出て行く、そういう時代が日光にもあって、経験や歴史があるものですから、日光市においては二社一寺中心に、特にセールスやプロモーションをしなくても、いつでもお客さまが来ますということも含めて、殿様商売と言われてきました。「どことも連携しなくていいです」、「我々は我々で、観光で食べていけたらいいのです」ということが、これまでの観光の根底にあり、観光行政においてあぐらかいていた時期があったものですから、やはり観光のお客さまが減る時期があります。そこで初めて、今、この厳しい観光地間の競争も含めて、やはり日光市も他の地域と連携する、日光市の観光の磨き上げをしてプロモーションをどんどん国内・海外に発信をしていくなどの流れに、間違いなくなっています。そして、私もその先頭に立って、トップセールスをやっていきたいと思っています。

この広域連携の話は、皆さん、多分10年前でしたら、全然、日光市も話に乗っていなかったというのが現状だと思っているのですが、今のこのタイミングでいけば、ぜひ他の自治体

と連携を図らせていただいて、そしてお互いにウィンウィンで、日光市にお客さまをいただく、さらには、日光市のお客さまを他の地域に広げていくという広域連携のルートなどもつくっていきたくと思っています。この後のパネルディスカッションでもそのあたりのお話を、ぜひ私もしたいですし、他の自治体の方たちのお話もお聞きしたいと思っています。引き続き、この後のパネルディスカッションもよろしくお願ひしたいと思っています。

ここまで、短い時間ではありましたが、日光市のこの現状を皆さま方にお伝えさせていただきました。日光市の観光が発展することによって、ひいては、栃木県のブランド向上にもつながってくると思っていますし、栃木県全体の観光の発展にもなると思っています。私もトップとして、先ほど高藤先生の最後の結びで、政治は結果責任とありましたが、市長になって、まだ1年弱ですけれども、政治の場から最後に出る時に、本当に結果が残っている、そして皆さんに、市長はよく仕事をして結果が残ったと思っただけのように、努力をしてまいりたいと思っています。引き続き、皆さま方のご支援とご協力を賜りたいと思っています。私からは以上です。ありがとうございました。(拍手)

## パネルディスカッション

# 第2回 「とちぎ SHOGUN 物語」 シンポジウム



### パネリスト

- 瀬高 哲雄 氏（日光市市長）  
松井 正一 氏（鹿沼市市長）  
馬場 将広 氏（宇都宮市総合政策部振興担当副参事）  
野尻 博之 氏（栃木市東京サテライトオフィス所長）  
菅沼美智子 氏（小山市総合政策部総合政策課 連携・協働調整担当）  
尾上 仁美 氏（小山市立博物館学芸員）  
落合 正浩 氏（壬生町東京サテライトオフィス所長）  
藤栄友里絵 氏（壬生町歴史民俗資料館学芸員）  
齋藤 恒夫 氏（栃木県生活文化スポーツ部文化振興課課長補佐）

### 司 会

- 須賀 英之 （宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長）

### ■須賀

本日は、六つの自治体と、そして栃木県からもお越しいただいています。前半と後半に分けて、5時半までとします。

まず各自治体の皆さまから、有する歴史資源、特に日光東照宮につながる資源について、どういう取り組みをされているか、ご紹介をお願いします。後半では、各自治体が連携した観光振興、MICE のアフターコンベンションも含めて、どのようなことができるのか、また、この圏央まちづくり協議会に対する期待です。

では、各自治体からお話をいただきます。

## ■落合氏

壬生町の落合と言います。私は東京サテライトオフィスで、東京で壬生町や栃木県のことをお話ししながら、ご縁をつなぐ仕事です。今回のタイトルは、「～江戸から日光へ～」となっているのですけれども、逆に、私は壬生から江戸に通いで行ってしまして、毎朝、新幹線で行って、何か東京で良いネタはないかと探して帰ってきています。また逆に、壬生のPR、かんぴょうをちょっと配った時に、全く知られていなくて。これは私のお手製なのです。自分で作ったハンドメイドの、愛用アイテムなのですけれども、こういうものを持ち込んでいって、いかにして知ってもらって、興味を持ってもらって、そこから壬生につなげるというやり方で仕事をしています。とにかく東京の人に、まずは、壬生のことを興味持ってもらおう仕事をしています。

## ■藤栄氏

壬生町の歴史民俗資料館で学芸員をしています、藤栄と申します。壬生と言いますと、日光までの聖地への道のりで、繁栄していった町と言えらると思います。日光東照社を秀忠が造営した際に、その副総督、副監督に壬生の藩主が任命されたということで、そのつながりから将軍のお泊まりになる壬生町がつくられまして、周辺城下町、宿場町が栄えました。将軍が泊まるに値する、安全に泊まれるお城にするために、こういうふくべや殖産興業に力を入れました。外国の脅威が迫ってきた時には、西洋の蘭学、西洋医術、西洋砲術を広めまして、今の医科大学さんがありますように、医業の町、壬生につながる原点となっています。

日光と言いますと、江戸までのつながりがよくPRされるのですけれども、壬生は明治になりまして徳川から新しい政府に移り変わった際に、どう日光をPRするかで、壬生の侍が日光で町おこしをしたという歴史があります。本日、皆さまにお配りした茶色字のチラシは、令和6年に当館で企画展をしたものです。日光にアトリエを造って、外国人避暑地を目的にした観光客の方に対して、絵画や漆器、陶器などを展示即売場で販売した歴史もあります。表面の大きい鳥の彫り物は、現在も金谷ホテルのロビーに展示されている、壬生の方が作った作品になります。

壬生は、やはり聖地への道のりの中で、繁栄してきた町とお伝えすることができると思います。

## ■菅沼氏

小山市総合政策課の菅沼と申します。担当業務は小山市と地域の定住自立圏や栃木県との連携業務、包括連携協定とあって企業さんと連携して、業務を進めていく仕事をしています。小山市と江戸のつながりということで、博物館の学芸員よりご説明させていただきます。

## ■尾上氏

小山市立博物館で学芸員をしています、尾上と申します。専門は江戸時代です。

小山と言えば、中世の豪族である小山氏が一番の推しなのですけれども、江戸時代の担当から言わせていただきますと、日光や家康とのつながりを大切にしています。ピンクの冊子は、小山を紹介しているのですけれども、6ページによくまとまっています。この6ページの上にあります

す小山評定跡は江戸時代の始まりで、小山の推しのポイントになっています。

関ヶ原合戦の直前に、家康は小山にいて、ここで会議を開いたのが小山評定という史跡です。小山まで来ていた理由は、上杉景勝を討伐するためです。ここで石田三成が京都伏見で挙兵したという情報もたらされて、小山に重臣たちを集めて、家康はこれから先、上杉を攻めに行くのか、それとも上方に戻るのかという会議を行いました。結果として上方に戻ることを決めまして、関ヶ原合戦で大勝を得たという事跡があります。小山評定はここ数年前から、話題になっていまして、やっていないという話もあったのですけれども、私としてはほっとしたこと、結局、やったとわかりましたので、皆さまもそのように覚えておいていただけたらと思います。家康公は小山で会議を行って勝利を得たということで、パワースポット、ラッキースポットと言われています。

その下の2番、小山御殿広場というのは、歴代の将軍たち、特に前半の将軍たちが日光山へお参りする際に、ここに昼食を取るための御殿がありました。小山評定が行われたという事跡から、この場所に小山御殿が造られたと言われています。

4番の乙女河岸も、家康公が小山まで来る時に、荷物や武具などをこちらの河岸で陸揚げした、または、小山から上方に戻ると決めた時に、ここから家康公は船に乗って、江戸まで行ったと言われている場所です。

徳川家康にとってパワースポットである小山なのですからけれども、中世小山氏にとっては、この小山御殿のある祇園城というお城で何度も敗戦しています。その後、江戸時代、小山藩の藩主本田正純は、その後、失脚してしまうという、パワースポットではない点もあります。幕末の戊辰戦争の鳥羽伏見で戦った後、小山で戊辰戦争の衝突が4回起こりまして、いずれも幕府軍が勝っているのです。徳川家にとってはパワースポットと言えるかと思います。ぜひ小山に来ていただけたらと思います。

## ■馬場氏

宇都宮市総合政策部の馬場と申します。東京のサテライトオフィスの方、栃木市、壬生町がいらっしゃると思います。私も昨年3月までは宇都宮市の東京オフィス所長を務めていまして、昨年4月からは宇都宮で振興担当副参事ということで、大学や宇都宮市とその周辺に立地するR&D拠点とのオープンイノベーションをどう進めていくのかを検討しております。

江戸時代のエピソードです。本多正純の釣天井が有名かと思っています。その他、江戸時代のエピソードになりますと、戸田家の社参を参考にして、平成8年から「宇都宮城址まつり」をやっています。宇都宮市の中では徳川家につながる取り組みとして、今も続いているのです。

私は、街づくりに携わっていることが長かったので、本多正純の町割りを挙げたいと思います。日光街道と甲州街道の付け替えをするなど、街の形が400年たった今も、宇都宮には連綿と生きています。宇都宮市の都市構造として、三つの環状線があって、12の放射道路があり、一般的には3環状12放射と呼んでいますけれども、その1つの都心環状線が開通します。そういう町割りが、今も続いています。江戸時代に造った区画がその後の町づくりに与えた大きな影響を実感しているところです。

## ■野尻氏

栃木市東京サテライトオフィスの野尻と申します。私も落合所長と同じように、CIC Tokyoを拠点に活動しており、私は週の半分通っていきまして、残りの半分は市役所で勤務しています。栃木市として都内にサテライトオフィスを設置している目的ですが、栃木と聞きますと、皆さん、栃木県を連想される方がとても多くて。栃木市をいかにPRできるか、あとは、企業誘致活動や移住定住促進などの活動をしています。

栃木市は日光例幣使道の宿場町として、また、まちの中心部を流れる巴波川によって栄えました。巴波川では、「蔵の街遊覧船」など、その歴史を体感できる観光資源があります。日光例幣使道につきましては、倉賀野のほうから栃木県内ですと足利市、そして佐野市、栃木市、鹿沼市、日光に続く道となっています。そういった歴史的なストーリーが残されています。例幣使道、宿場町として賑わいがあった名残と言いますか、和菓子屋さんが多いことも含め、街並みや景観など、歴史を知るうえでは重要で、観光の目玉でもあります。

江戸とのつながりですと、「とちぎ秋まつり」が11月に開催されます。山車が蔵の街大通りを練り歩きます。江戸から静御前の江戸型人形山車を購入して、その後、山車への関心が高まり、各町内が山車や人形を競って製作するようになったことから、「とちぎ秋まつり」は始まっています。豪商が多く、NHKの大河ドラマで「べらぼう」に登場した浮世絵師「喜多川歌麿」ゆかりの地としても知られ、多くのお客さまに栃木市にお越しいただきました。「豊臣兄弟！」の脚本をされている八津さんは栃木市出身です。今日は皆さんと観光の広域連携を学ばせていただきながら、また新たな発見ができればと思っています。

## ■松井氏

鹿沼市長の松井正一と申します。

まず歴史になります。鹿沼市内で、徳川将軍と関連のある場所は幾つかありまして、例えばお寺関係ですと、薬王寺と宝蔵寺があります。薬王寺につきましては家康と家光のいわゆる遺骸、亡きながら日光に運ばれる際に滞在をした記録があります。宝蔵寺につきましては2代将軍秀忠、3代将軍家光が日光社参の帰路に休息をしているお寺です。市内の中央小学校が建っている場所は、4代将軍家綱が日光社参の帰路に休息をした御殿です。御成橋がありまして。これはまさに日光社参、将軍の社参の際に橋が架けられたことから、御成橋、お成りという形で残っています。

「SHOGUN」パンフレットに街道筋の宿場の地図がありますように、鹿沼市内は日光道中の壬生通です。楡木地区、奈佐原地区、鹿沼市区の三つが、鹿沼市内の宿場となります。その宿場跡は地形的にそのまま残っていきまして、今後の歴史的な活かし方を思っているところです。

また、日光道中ですけれども、農産物ですと、8代将軍の吉宗が政策で、朝鮮ニンジンをたくさん作っていたのです。その朝鮮ニンジンを幕府が設置した場所が鹿沼市板荷村です。今は板荷というところですが、ニンジンの製法所が実際にあった記録があります。

江戸から明治に入りますと、幕府の庇護を失い、日光の社寺が厳しい時代があったのですが、社寺の建物、建造物等を保存・修理するために、保晃会が設立をされました。保つという字に、

縦に日光と書いて、保晃会です。保晃会の設立には、栃木県議会初代議長でもありました安生順四郎が携わっていたとありまして、徳川江戸幕府とつながっていると顧みることができました。

現代と日光を考えた場合に、鹿沼市はどう影響を受けてきたかを挙げますと、何と言ってもユネスコ無形文化遺産に指定をされた「鹿沼秋まつり」です。今宮神社祭の屋台行事に尽きると思っています。1608年にお祭りがスタートします。雨乞いのお祭りとして、400年前に、先ほどの瀬高市長のご説明にあったあの杉並木街道です。当時、日光東照宮を含めた、造営に携わられた宮大工が鹿沼にもお住まいになり、その技術を彫刻屋台に注入していただきまして、現在、屋台が鹿沼に27台残っています。県内では那須烏山と鹿沼のお祭りが一緒になっているということで、今年はユネスコ無形文化遺産認定10周年です。

私はイチゴのバッジを着けているのですが、鹿沼市は「いちご市宣言」をやっています。

「いちご市宣言」10周年という周年行事が二つ続きます。後段の広域連携でも、この歴史という切り口は、鹿沼市にとっても、大切です。

## ■須賀

朝鮮ニンジンのお話が出ましたけれども、このキャンパスは安田財閥の創始者、安田善次郎の家があったところです。安田商店が1879年に宇都宮支店をここにつくりまして、鹿沼や大田原の朝鮮ニンジンを横浜から中国に売って、そのお金で、安田銀行、富士銀行、安田財閥、みずほ銀行につながっています。南東北、北関東の産業革命がこの場所から始まったということで、歴史がある場所で、学生たちにも伝えているところです。

## ■齋藤氏

栃木県庁の文化振興課で文化財の仕事をしています、齋藤です。

シンポジウムのテーマになっている街道について、お話をできればと思っています。県教育委員会がかつて10年ほどかけて、県内の街道をくまなく調べました。街道とその道筋の文化財を調べて、何百ページにもなるような報告書があるのです。今、日光街道と呼ばれている街道の江戸時代の正式な名前は、日光道中です。小山から壬生を経由して、鹿沼の楡木を通過して、鹿沼、今市、日光に至る道です。これは、例幣使街道と呼ばれているところもありますけれども、全体の道は、日光道中壬生通りと呼ばれていました。では、例幣使街道はどこなのかとなりますと、群馬県の倉賀野から栃木市を経由して、鹿沼の楡木に至る道が、例幣使道と呼ばれていました。

まず日光街道に注目してみますと、昔の日光街道は現在の国道4号とほぼ同じぐらいのルートをとるのですが、野木町から宇都宮に至るまでを想像していただきますと、川は渡らない。山がないのです。栃木県の南部を縦貫する街道として適地だったと。昔からこの沿線は、遺跡が多い場所なのです。ということは、古くからこういった地形が活用されて、街道になったと。その傍証としては、鎌倉時代のいわゆる鎌倉街道も、ほぼ同じルートを通っているとありまして、県内の大動脈に、なるべくしてなったところかと思えます。宇都宮から日光に至る道を思い起こしていただいても、小さな川はあるのですが、大きな川はありません。山も越えません。そういっ

た形で日光まで至ると、最後に大谷川という川が、聖地を画するかのようには現れるというところで、もうそういった演出的な感じもあるのです。聖地の前で、初めて大きな川が行く手を阻むと。そこには神橋が架けられている。

この街道沿いには、例えば川が両側に流れています。例えば日光街道ですと鬼怒川、あと思川、黒川です。昔は、物資の大量輸送には船が欠かせませんでしたので、河岸という、船着き場ができると。その船着き場が街道と一緒に結節しているという場所が、栃木であったり、壬生であったり、小山の乙女です。

そういったところが、物資の流通拠点になっているわけです。その物資の流通を支える意味でも、街道が重要でした。

日光東照宮の造営が1617年になりますと、その後は將軍社参の道になって、重要になってきます。幕末になるまでに16回社参しているのですが、重要な道は、幕府が直轄して管理するというので、道中奉行の管理となっていました。今で言う、国交省直轄管理の一桁国道のようなものです。將軍社参で言えば、政治の道と言えるかと思います。物資の流通の要になっているところでは、経済の道です。最後にこの街道はやはり文化を伝えた部分がありました。松尾芭蕉ですと、元禄に日光で向かっていますけれども、そのルートは、小山に行きまして、そこから日光道中壬生通りです。壬生を經由して鹿沼、今市、日光へという形で通っています。「日光を見ずして結構と言うなかれ」などという言葉がありますけれども、これはどうも江戸時代に始まったようです。庶民が日光を社参する、参拝する旅行が大変人気だったとありまして、文化や旅行の道という観点もあったかと思います。

道と一口に言いますが、政治、経済、文化・観光といったさまざまな面で、下野を支えていたと言えるかと思います。

## ■須賀

では、ここから後半に。ロマンチック街道のような、各自治体がSHOGUN街道をキーワードにした観光振興やMICEの振興を図れないかということで、例えば県が、以前に東京、江戸から社参ウォークをやりました。ぜひ各自治体だけではなくて、共同で街道のガイドブック、町歩き地図を作る、幾つかのツアーを旅行会社との共同でやってみるなど、いろいろなアイデアがあると思います。

各自治体が連携した観光振興、MICE振興のテーマについてお話いただければと思います。

## ■瀬高氏

広域観光の連携ですけれども、MICEを含めて、宇都宮市とはお互いにウィンウィンで連携を図っています。社参ウォークに続いて、昨年、日光市の杉並木植樹400年のイベントとして県と日光市が連携して、「杉並木ウォーク」を共同で開催させていただきました。定員500名だったのですが、すぐに定員を超える申し込みがあり、募集停止になりました。それぐらいやはり人気があるのです。

社参ウォークは日光東照宮 400 年式年大祭で実施された。そのような開催も面白いですよね。日光街道を歩く、さらにマラソンなど、そういう大きな、縦の街道を通じたイベントは参加者の実績が出ていますので、面白いと思っています。

実際に宇都宮との MICE での連携では、宇都宮市の会議に、日光市の職員が入って一緒に開催させていただくなどが考えられます。そういう行政上の手続きは、これからさらに連携を図るときには、ポイントになると思っています。

MICE に関して、市民の皆様からは、大きな MICE の会議場を日光市単独で造ってほしいなどの話もあるのです。ただ、公共施設に関しては正直、日光市もそうですが、どんどん縮小して、統廃合している時代ですので、自治体単独で公共施設、MICE 会議場を造ることは、時代の流れからしても厳しいと思っています。ですから、宇都宮市の強みとして、新幹線が通っていて、交通の便もしっかり発達していますので、会議場は宇都宮市で確保していただく。宇都宮市も当然、観光全体で、いろいろなツールもありますが、そこにプラスして日光のブランド力を活かしていただければと。お互いにウィンウィンで、お互いにメリットがある仕組みづくりや、イベントや行事を、連携を図ってつくらせていただければ、乗りやすい、連携しやすいというところがあります。

## ■須賀

先日夜、あしかがフラワーパークに行ったのですけれども、外国人がたくさんいて。「なぜこんなにいるの」と聞いたら、「バスツアーで、外国人が東京から日光東照宮に行った帰りに足利に寄って、お食事をして、お土産を買って帰ります」と。帰りに、なぜ足利に行くの？それほど遠くありませんし、東武ホテルグランデに泊まっている外国人は、宇都宮ではなくて日光に泊まっていると思っているのです。考え方が変わってきているという感じました。

宇都宮 MICE ネットワークで、観光庁の補助を得て、二荒山神社に日光江戸村から派遣してもらって、国際会議のナイトタイムエコノミーとして、忍者ショーをやってすごく人気がありました。そのような組み方もあるのかと思います。

## ■馬場氏

私も動画を見せていただいて、日光江戸村の忍者ショーが人気だったと伺っています。そういう MICE の連携が、宇都宮市にとって、今後、重要だと思っています。ここ 2~3 年、実際にお話に行ったら日光市さんもウエルカムで対応していただいたのは、ありがたいと思っています。

広域観光を進めていく中では、圏央まちづくりのご協力が不可欠と思っております、会員企業さんの力です。ここの力を活かしていけないかと思っております。会員企業さんは、製造業の方が多いですけれども、観光となりますと、自分たちと関係ないという形にはなるかと思うのです。そこを、ワークショップなどをしていただいて、栃木市ではサントリーがいらっしゃいますし、連携ができないのかと思います。ムロコーポレーションは廃材を使ってキーホルダーを作るなどにも取り組んでいます。また、工場をお持ちになっているところに行かせていただきますと、

海外から毎月、視察にいらっしゃるとお伺いしています。視察者の方にPRはしていただいているのですが、「SHOGUN 物語」を企業と連携して、海外の顧客に発信していただくなども良いかと思います。

圏央まちづくりの企業群が、観光にもうまく関われる仕組みが出てくると、さらに盛り上がっていくのではないかと感じているところです。

## ■野尻氏

JR東日本のデスティネーションキャンペーンで、県南の7市町で歴コレ（とちぎ県南地域歴史文化財コレクション）を事業としてやったことがあります。具体的には各施設に行って、歴コレカードを集めてコンプリートするとコンプリートカードがもらえるのです。やはり見ていただくだけではなくて、小さいお子さまも、このカードを集めるという欲求を駆り立てながら、楽しみながら、市町を回っていただく取り組みは、有効だったと感じています。いろいろな市町のそういった資源をつなぎ合わせることも、大切だと思っています。

2024年には日光東照宮さんとガンダムがコラボをする、二荒山神社で3×3の試合があるということで、歴史的なものとか何かを掛け合わせますと、新たなファンが増えるのかなど。栃木市では蔵の街遊覧船を活用して栃木シティの新チームお披露目の船上パレードをやったのですが、地域らしさも出て、そこからファンが増えるのかと感じています。

## ■菅沼氏

平成16年に、小山市市政50周年の記念イベントで、市民オペラで『小山物語』を開催しました。小山評定が、なぜ開催されたのかなど、そういった小山の歴史を基に創作されたオペラを催したことがあります。郷土の歴史を住民の方と一緒に振り返ることができました。盛り上がりましたので、歴史を振り返ることも共同でできると良いのかと思いました。

小山市には桜の名所がたくさんあります。先ほど、マラソン大会などは良いのではとご提案がありました。小山でも思川桜という桜の名所がたくさんありますので、お花の時期などに、皆で地域の魅力を発信できるイベントをしていければ良いかと思います。

## ■須賀

歴史的な資源、景観だけではなくて、文学や音楽など、食文化も大事になってくるのではないかと。

## ■尾上氏

博物館も各市町村さんがお持ちで、県内幾つもありますので、つながりを活かしたイベントなどができるのかと。

## ■落合氏

私が入ったCIC Tokyoの会長さんは、ナイトタイムエコノミー推進協議会理事をやられてい

まして。壬生で観光といった時に、いかにして夜のコンテンツをつくって……要は、遅い時間までいれば、泊まるからという発想だと思うのです。

しかし、真っ暗で、あしかがフラワーパークではないのですけれども、イルミネーションをすれば人が来るなどにはありますが、お金がかかりますので、そこを何とかしたいと、入居してから3年ぐらい、何かないかなと悩んでいたのです。先日、奥日光の三本松茶屋さんが来た時に、奥日光の星空がきれいですと言われて。疲れた時に星空を見上げて、今日は星がきれい時々思うことがあるのです。それが日光には常にあると思って、星空を見る観光に力を入れたいと話をされていました。それを応援したいと思いまして、3月に小規模なのですけれども、今奥日光の星空とオンラインでつないで、入居企業の方がお茶で町おこしをやりたいということで、お茶を入れて、私たちはかんぴょう巻きを出します。栃木市の太平山の三大名物と言いますと、焼き鳥、卵焼き、団子です。例えばそのかんぴょう巻きを、今度、星見をする時に、お茶を飲みながらやると幸せになれるなど新名物になればと。

奥日光自体がこのパワースポットと言いますか、日光東照宮がパワースポットともありましたので、日光の手前で、壬生でかんぴょう巻きをゲットしてそこから行くといった、東京の人がエネルギーを感じられるツアーができると、付加価値が高まると思っています。旅費をどうする、宣伝をするためにチラシをどうするなど、先に予算がかかってしまいますので、今、私たちは東京に行っているという利点を活かして、私がかんぴょう巻きを持って行って、三本松茶屋さんがオンラインでつないで、まずは東京の人に奥日光で癒しになる体験をしてもらって、それが気に入ったら、日光に来てもらおうという作戦をやってみようかと考えています。

#### ■藤栄氏

壬生の資料館は城址公園にありまして、駐車場からもちょっと距離があるということで、なかなかお客さんに来ていただけていません。お配りした年表の裏に、郷土の偉人ということで壬生の偉人たちをご紹介させていただいているのですけれども、誇れる偉人たちばかりです。太田胃散の創設者が、壬生にルーツがあるなどです。映画『国宝』の中で、三上愛さんが締めている帯があるので、名古屋帯を染めているのが、壬生出身の高久空木という染色家です。

こういった歴史をどう知っていただくかと言いますと、やはり他の資料館や博物館さんたちと連携をして、資料館巡り、博物館巡りなどの一環でPRしていけたらと思います。

#### ■松井氏

今日はこの広域観光という視点、また歴史を活かしていくという視点で見ますと、圏央まちづくりの皆さまのお計らいで、そろってディスカッションできることがとてもうれしくて。結論から言えば、このメンバーで、歴史的なコンテンツをお互いに出し合って、商品開発をしようかと。そのような角度が手っ取り早いのかと。お互いのまさに資源を出し合って、作戦会議をやれると、率直に感じました。

私は市長になってから、広報誌交流ということをやっています。具体的には、東京都墨田区と

鹿沼市でお互いの広報誌に、例えばうちの鹿沼市の話題を墨田区の広報誌に載せる、墨田区の話題を鹿沼市に載せます。

そのようなことをやりながら、お互いこの圏域の自治体間の情報を、お互いの自治体の人に知ってもらえることもできると思いました。作戦とあえて申しましたけれども、知恵を出し合う場を、このシンポジウムを機会に、ぜひ各首長さんのお計らいも含めて鹿沼市は大賛成です。

## ■嶋田氏

昨年まで真岡市で副市長をしていました。

真岡はご承知のとおり、あまり観光資源が、ご紹介があった市に比べますと少ないです。今のお話を伺って、やはり商品開発をしようかと。真岡市内で商品開発をして、広域連携で本当に魅力ある商品をつくっていくことは良いかと感じました。

## ■齋藤氏

県で、私は文化財の仕事に専門でずっとやっています。全国的によく言われているのが、文化財の担当は、分かっていることを皆に知らせること、発信することが下手ですと。それではいけないと担当者は皆が思っていて、やっているのです。

先ほどの歴史の道調査事業を10年間やってきて、かなりの資料がまとまっています。それを県民の皆さんにどう知っていただくかがとても大切なのです。例えば今日お配りした、いにしへの回廊という事業です。こういったテーマを決めて文化財を紹介して、皆さんに利用していただく目的で作っています。ホームページと紙ベースのものがあるのですが、今日はQRコードもお配りしました。文化財は、堅苦しい、敷居が高そうな感じがするのですが、できるだけそれを低くしたいという思いも持ちながら、やっているところです。

文化観光という言葉に耳にすることがあるかと思うのですが、地域の歴史や文化、伝統を軸にして観光を組み立てようというものです。おそらく三つポイントがあるかと言われていきます。まず歴史や文化にストーリーを持たせることです。「SHOGUN」というテーマでストーリー性を持たせるということがまさしくそうだと思うのです。皆さんの理解を深めることに役立つという部分があるかと思います。もう一つが、ユニークな体験の組み合わせとされています。ユニークベニュー、これは「特別なところに特別な体験」、例えば文化財でイベントをやることです。鹿沼市ですと彫刻、日光市では漆塗りや彩色などの社寺の技術です。そういった技術を体験していただいて、その地域の文化をよく、深く知っていただくことが大切かと。この情報を発信していくこともありますので、優良なコンテンツを作っていこうと。デジタルや昔ながらの紙ベースもあります。優良なコンテンツを作って、深く知っていただく、この三つが大切かと思えます。

個人的には、文化財と言いますと敷居が高い感じがします。食や風景も組み合わせたいと思っています。餃子や、イチゴなどです。これは現代のものという感じがしますが、歴史背景が必ずあって、そこに生まれたのは何か必ず理由があると思います。そういったことも含

めて紹介していくのです。伝統ある郷土食や、郷土の伝統的な食材です。日光市ですと湯波がありますし、壬生町はかんぴょうです。昔の料理を復元しようという試みもあると伺っています。壬生町や栃木市で、江戸時代の料理を昔の記録を基に復元しようなどという試みもあると聞いていますので、そういった食も組み合わせられると、魅力が高まると思います。自分たちだとその魅力に気が付かないこともあるかと思ひまして。私自身も気が付いていない栃木の魅力はあると思います。そういった視点も大切にしていけると良いのかと思いました。

#### ■須賀

栃木県も文化財が教育委員会から県民文化スポーツ部文化振興課になりましたので、また新しい役割も増えたと思います。

では、県北の西須さんです。那須塩原市の元観光局長です。

#### ■西須氏

湯西川に限って言いますと、若い連中が一緒になって、「かまくら祭」です。「かまくら祭」は皆で小さいかまくらを作って、そこに火をともしというものです。県北はもちろん広いですし、その中で歴史もあります。自然、文化もひとまとめにして、そういう大きくくりの中でもっと栃木県を元気にしていき、金を稼ぐ取り組みを地域の皆さんと一緒にやっていくことがさらにできれば良いと思っています。横や縦のつながりを積み上げることによって、世界から見れば価格としてきちんと反映できるはずですよ。

日光国立公園が91周年目を迎えたところです。国立公園は全然稼がないで、金を落とさないでちょっと見て帰るような時代がずっと続いてきたわけです。栃木県はもっと金を稼いで、もっと楽しんでもらえる町になれるように、皆さんのお力も拝借しながら、進めていっていただければ良いと思います。

#### ■須賀

情報発信が欠かせませんので、「栃ナビ！」の野村さんに話してもらいましょう。

#### ■野村氏

栃木県の情報を発信して25周年目の「栃ナビ！」編集部からまいりました。皆さまの魅力ある市町の情報、歴史で切って、というところをぜひお手伝いさせていただきたいと思いました。私たちが得意なのは、たくさんの方をつなげることで、商品開発なども、皆でつくっていくことができるのかと思って考えていました。

#### ■須賀

最後に一言ずつ感想や、今後の圏央まちづくり協議会に対する期待などを、お話いただければと思います。

#### ■齋藤氏

文化財は発信することが下手というところがあるのですが、いろいろな協力をしていくことによって、歴史、文化が県民の皆さん、ひいては全国の皆さんに知っていただけることがきっとあるだろうと思いました。

#### ■藤栄氏

壬生町も歴史のPRは、これから伸びしろがあるのではないかと考えています。資料館職員として、PRできる歴史の発掘を今後もできたらと思いました。

#### ■落合氏

稼ぐ力は、私たちだけでは全然で。本当に今日の皆さんから、このようなことをやってみないとかの感じでちょっと言っていただきますと、壬生町長なども「いいね、やっておいて」との感じで進むと思いますので。本当にラフな感じで、ちょっとお話を頂いて、地域を盛り上げていこうという形がもっと出てくると、すごく楽しい栃木県になるかと思いました。

#### ■尾上氏

私のような学芸員が小山市には15人ぐらい、各分野でいます。学芸員をどんどん利用して、そういったつながりをつくっていけたら良いのではないかと思いました。

#### ■菅沼氏

小山市の魅力は、とても交通の便が良いにもかかわらず、その強みを活かしたプロモーション活動がちょっと不足しているのかと。課題を抱えながらも一生懸命解決しようと取り組んではいるのですが、連携をして何かをすることがまだまだ不足していると思いますので、今日をきっかけに連携を図って、栃木の魅力を発信していければと思います。

#### ■野尻氏

できることをまず実現、実行に移すことが重要と思っています。栃木市は、鹿沼市と日光市と、移住・定住では一緒に連携をさせていただいていますので、観光分野でもぜひ連携したいと思っています。外国人のお客さまが日光市に訪れているということは、おそらく栃木市を東武日光線で通過していると思いますので、いかにそこで降りてもらえるかです。そういった取り組みが滞在時間の延長、宿泊につながるのかと思いますので、小さなことでもしっかり頑張っていきたいと思っています。

#### ■馬場氏

昨日、堺市の東京事務所の方とお話をする機会がありまして、世界遺産をテーマにした4市のイベントをやるということで、堺市の大山古墳です。日光市も一緒に入られると伺ったのですけ

れども、富岡製糸場と、もう一カ所と聞いています。堺市で最初にイベントの話が持ち上がった時には、お客さんが来ないのではないかなのような話があったらしいのですけれども、実はふたを開けてみたら、堺市でやったイベントの中での申込者が一番多かったと聞いています。今日集まったこの6市町で、鹿沼市が4月から東京にもオフィスを持たれるということで、あまりお金をかけないで、東京で気軽にチャレンジして、プロダクトの制作やツアーをやるなどの取り組みもありますので。

行政で横連携と言いますと、お金の話が先に出て、なかなか進まなかったりするのを、トライアルでまずやってみることが、この6市町であればできるのではないかと思って話を伺っていたところです。私はもう東京にいませんが、東京にいる方たちに期待して、そのようなことを頑張っていたいただければと思いました。

## ■松井氏

広域観光、そして各自治体の持つ魅力の情報発信という意味では、鹿沼市もこれからのチャレンジに尽きると思っています。

4月から第9次鹿沼市総合計画がスタートします。そのテーマは「豊かな自然と文化につつまれ 人が輝き地域が輝く みんなが住みたいまち」です。これをモチーフに頑張っていきたいと思っています。これは鹿沼市単体でやっては駄目だという思いがあって。今日はこのシンポジウムで、6市町がつながることができました。首長さんには、いつもお世話になっていますが、担当者さんの熱意も心強いと思いました。ぜひ何かできないかということで、鹿沼市からも考えて提案ができると良いと思った次第です。

東京サテライトオフィスですが、壬生町、栃木市、宇都宮市などにもご指導を賜りながら、この4月に高輪ゲートウェイ駅のそばに、鹿沼市も出します。もう何と言っても情報発信、発信力の強化に尽きると思うのです。私が提唱する鹿沼発、鹿沼産、題して「Made in 鹿沼」、そして稼ぐ鹿沼という意識が、東京の方にどの程度通用するかと。そのようなことを実験的にやっていきたいと思っています。そのためには、先進市であります宇都宮市、栃木市、壬生町、あとここにはいらっしゃいませんが、益子町も含めてご指導をいただきながら、さまざまなネットワークを駆使して、鹿沼市も元気になるよう頑張っていきたいと思っています。

## ■瀬高氏

今日は観光の位置付けで広域連携という話でしたけれども、すでに公共施設、あとはインフラなど、広域で連携することによって、国から補助金を出しますという流れなのです。ですから時代的に、やはり市単独、町単独でやる事業は、だんだんと寂れてきて、近隣の自治体同士でいかにいろいろな事業連携を図って、共存共栄していくかという時代になっていると思っています。

一昔前は、まだまだ首長同士のつながりという部分では弱くて、連携に支障があるというような場合は「やめよう」などということがあったのです。

私と松井市長は、仲が良いです。年に2回ほど、一緒に食事しながら連携していきましよう

いう話をさせてもらっていますし、そこはもうある意味、時代の流れとして、本当に地域、近隣の自治体が活性化することによって、ひいては最終的に地域の盛り上がりになると思っていますので。今、どの首長も、前向きな方たちばかりですから、そのあたりを、栃木県全体として地域が発展するために、われわれ基礎自治体がこの観光も含めて、広域連携を図っていくことが成長につながると思っています。

## ■須賀

圏央まちづくり協議会の代表理事の古池先生から、決意表明をお願いします。

## ■古池

代表理事を務めております古池です。もう一つの仕事として、この大学で都市と交通、特にLRTによるまちづくりを専門に教えています。

本日のテーマは、「とちぎ SHOGUN 物語」です。このシンポジウムは2回目です。冒頭の高藤先生の歴史のお話、瀬高市長の広域連携の視点、そしてパネリストの皆さまからの多様なご意見、どれも興味深いものでした。



古池

とちぎ圏央まちづくり協議会は、9年前の2017年に当時建設中だった芳賀・宇都宮のLRTの積極的な活用を民間企業の立場から応援していくことを目的として、会員企業50社からスタートした企業連携組織です。当初は栃木県の県央地域の企業が中心でしたが、県北や県南の企業からも参加したいという声が高まり、現在では県全域に広がり、約130社が参加する“オール栃木”の組織となりました。ホンダをはじめ大手企業も参加しています。

私たちが目指してきたことは大きく二つあります。

一つは民間企業同士の連携です。大手企業と地元企業の関係が必ずしも対等ではない場面もありますが、当協議会では会費も含め、規模に関係なく“同じ企業同士”として対等に議論できる場をつくっています。

もう一つは官である自治体の連携です。自治体はどうしても自分の地域を優先しがちで、隣の自治体との連携が進みにくい傾向があります。中国の故事に「遠交近攻」という四字熟語があります。これを逆にして「近交遠攻」、つまり“近くとまず手を結び、遠くと競う”ことが、人口減少時代の地域間競争を勝ち抜く鍵だと考えています。まさに今日のテーマそのものです。

これまで交流が少なかった日光と宇都宮の関係も変わりつつあります。他の自治体も同様で、その連携機能を支えるのが交通です。かつては徒歩を中心とした街道、今は自動車の道路ネットワークが中心ですが、これからは公共交通を軸にした広域連携が重要になります。

宇都宮で始まったLRTが、将来的には東武宇都宮線とつながり、壬生や栃木へと広がる。あるいは日光線にLRTが入り、鹿沼、日光へとつながる。そうした未来を見据えて取り組んでいきたいと思っています。

圏央まちづくり協議会に対して、いろいろとご要望を頂きました。重く受け止めて、できる限り協力していきたいと考えています。

まだ具体的な予定はありませんが、第3回「とちぎ SHOGUN 物語」シンポジウムを近い将来に開催できればと願っています。

本日は誠にありがとうございました。(拍手)